
羊

シュール

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羊

【Nコード】

N0870D

【作者名】

シユール

【あらすじ】

山田一男は十四年勤めた会社を辞めた。その後、彼にはさまざまな災難が・・・。

俺様・・・ハローワークにて

1

十四年勤めた会社を辞めた。

仕えた上司がみんなバカだった。五年前に親会社に吸収され訳の分からない人間がほとんど上のポストに着き始めた。お荷物の事業部だったため次々と事業の規模が縮小され大阪の営業所が万博で元気づく名古屋営業所の傘下に下り閉鎖された。両親が偶然にも一年置きに同じ左脚の付け根にセラミックを埋める手術をして色違いの杖を突き始めた。等々いろいろあったが結局は、この俺様がこんなところで終わるわけがない、が一番大きな理由だった。

会議室に人が集まり始めた。

辞めた会社に入社した時、総務課に配属され、社会保険を担当していた関係生まれで初めて行った職安と比較すると、建屋といい職員に女性が目立つことといいかなりイメージが変わり、名称もハローワークに変わったが、来ている人間は、十四年前と全く変わっておらず、輪郭になにか塵みたいなものが付着していた。

説明会が始まった。

首からIDカードをぶら下げた顔に締まりのない職員が、ビデオを交えいろいろと説明をする。

「自己都合で辞められた方の次の認定日は三カ月後の六月・・・」
会社が倒産したり、リストラで解雇された人達はすぐに雇用保険が貰えるのに対し、自己都合、要は自分から自らの意志で会社を辞めたものは三カ月間受給が遅れるらしい。

会社の倒産はしょうがないにしても、仕事ができなくて肩を叩かれた人間がどうして優遇されるのだろうか？この国の法律はできない人間にどうして手を差し伸べるのだろうか？彼らは退職金にしても上増しをもらっているはずだ。こっちは、上増しなどももらっておらず、バブル全盛期に国立のK大学を卒業して、日本の会社なら

どこへでも入れたのに、モノづくりの大切さを認識しているからこそメーカーに就職し、十四年間勤め、そして、いろいろと考えた末、自らの志を持って会社を辞めた、にもかかわらず待遇に差があるのは一体どういうことだ。

雇用保険なんか恵んでもらうほど俺は情けない人間じゃないよ、と心の中で捨て台詞を吐いてハローワークを出た。

約束の時間より十分早く到着すると、「あいにくまだ高木は会議中でして」といって五十歳くらいの女性が温かい緑茶を出してくれた。

夕方の五時と言えば、辞めた会社なんかは電話が鳴り響きフロア一全体が騒然としていたものだったが、高木さんがT大学を卒業して昔の大蔵省で勤めた後天下った財団法人のフロアは、正しく“静かな週末の午後”だった。

「すいません、お待たせしまして」

高木さんは、両脇にたくさんの資料を抱え、五時ちょうどに俺の目の前に姿を現した。

「K大学の経営学部ですか、何人か私の友達にもいるんですよ」

初対面の高木さんは、思っていたより年配だったが、グレーのスーツを品良く着こなし、とにかく背筋がすーっと伸びていた。

「前の会社はどうしてお辞めになったんですか？」

「まあ、いろんなことが重なったんですけど、元もと仕事にやりがいを感じてなかったのと、会社が合併しまして、事実上吸収されたんですけど、上にどんどん人が入ってきて、あっち行けこっち行けって飛ばされるようになって、こら完全に飼い殺しにされるなあ、辞めるんやったら四十なるまでに辞めんと次の会社探すのに苦労するなあと思ひまして思い切って辞めました」

この時俺は、転職するのに支障がない年齢のリミットを四十歳だと考えていた。

「前の会社ではどれくらいお給料もらっていました？」

「年収で六百五十万円くらいです」

「退職金は？」

「三百万です。」

「それは高いんですか、安いんですか？」

「さあ、どうなんですかね」

緑茶をすすった。

「食品メーカー、もしくはビールメーカーをご希望ということですよ」

「はい」

「なかなか、こういった消費財系は求人がないんですよ。特に関西は冷え切ってますから」

今回の件は、義兄が心配して話を持ってきてくれた。

三十八になった俺のことをいまだにカズ君と呼ぶ義兄は「カズ君の経歴だと職安でなんかきつとみつかないよ」と言っただけ高木さんを紹介してくれた。

「一部上場を含めた関西の企業ならほとんどの所は顔がきくから」

義兄も大学を卒業した後、高木さんの紹介で関西の中小企業に入社し、今は東京進出を果たして入社時より売り上げが一桁伸びた会社の営業部長をしていた。

「前のお仕事の経験を活かすことは考えていらっしやらないんですか？」

「ええ、できれば違った業種へいきたいと思ってますので」

俺がそう言ったとき、「顧問、お電話が入っております」と、緑茶を入れてくれた女性が開け放しになった部屋の扉の前に現れた。

「ちょっと失礼します」

高木さんはゆっくりと立ち上がると、デスクまで歩き、受話器をとった。

俺はその間に、十個しか入っていないのに三千円もした和菓子の袋を女性に渡しにいった。

「皆さんで召し上がってください」

女性は恐縮しながら、電話を掛けている高木さんに和菓子の袋を翳した。

「すいませんね、お氣を使つていただいて。」

テーブルに戻つてきた高木さんは目尻にしわを寄せた穏やかな笑顔を俺に向けた。

「お忙しそうなのでこれで失礼いたします」

立ち上がった俺を高木さんは止めなかった。

「では、いろいろと当たってみますので」

ほんまはもうどっか目星着けてんねんやろ、そう心の中で一人ごちた俺は、大阪のど真中に立つ財団法人の建屋を後にした。

「どうやったん？」

妻が聞いてきた。

「どうつて、まああんなもんちゃうかなあ。」

一カ月後にどっか一部上場の企業でも紹介してくれるんちゃうか。

「

「あんだ甘いで。」

バブルの時とは時代が違うんやで。

今の学生なんか三回生の時から就職活動してるって言うてたで。

それでもなかなか決らへんて」

「アホか。」

そんな学生はな、ほんまの大学生やないんや。

今は子供の数が少なくなつたから、偏差値が四十や三十でもいくらでも入れる大学があるんや。

俺らん時やったら、人に聞かれたら言うのんが恥ずかしいような大学でも堂々とコマースィアルを流して、また入った奴も胸張って私は大学生ですって言うてるやろ。

そんな奴らがまともな企業に入れるわけないんや。あいつらが大学生の就職率を下げてるんや」

「そうかなあ。」

今はどこの大学を出てるんやなくて、持つてる資格がもの言うんちゃうの。

あんだ、英語もしゃべられへんし、持つてる言うたら車の免許だけやんか。

中途採用やねんから言うてみたら企業としては即戦力を期待してんねんやろ」

「アホか、人間は総合力や。

英語しゃべれても分数でけへん、人の目見てようしゃべられへん、そんな人間を企業はとるか？

どんなアホな人間でも、大学や言いながら専門学校みたいに四年間英語ばかり勉強して、半年や一年海外留学したら、片言の英語くらいしゃべれるようになるわ。

そんな奴らに負けるわけないやないか。

俺はK大学を出て、一部上場企業に就職して、十四年間ちゃんと働いたんや。何社も点々と会社を変わってきたわけやないんや。

きれいな履歴書やで」

「まあ、それはそうやねんけど、時代がなあ・・・」

2

妻の予想は当たった。

四月になつても五月になつても、そして、雇用保険の支給が始まる初めての失業認定日（あなたは間違いなく失業していますと認められる日）の六月の最後の金曜日になつても、高木さんからの電話はなかった。

「ほらな、私の言つた通りやんか」

妻が、晩御飯の定番になりつつあった野菜炒めに次いで昼御飯の定番になりつつあったカップラーメンにお湯を注ぎながら言った。

「アホか。

高木さんわな、俺の経歴と照らし合わせて、しょうもない会社紹介したら失礼にあたるなと思って、慎重になつてはんねや。

分数でけへん学卒やつたらどこでもええわで済むけど、K大学出たエリートにはそんなことでけへんと、あの人自身もエリートやらその辺はわかりはるんや」

「はいはい、エリートの話はようわかったから、早よ食べて行つてきい。貰えるもんも貰われへんようになるで」

「雇用保険なんかまさか貰うなんて夢にも思わなかったわ。ほんま、屈辱や」

俺の本心だった。

指定時間ぎりぎりにはハローワークに入ると、フロアーには三十人くらいの受給者が国からの“お恵み”を待っていた。

「山田一男さん」

水槽の中で泳ぐ熱帯魚を擬似魚と間違えているのに気づいたとき、係の人に名前を呼ばれた。

「六月十六日から六月二十四日までの九日分が支給されます。振込は約一週間後です。」

今回の認定日は七月の二十二日です。

それまでに、最低二回の就職活動を行なってください」

フロアーを一階下りると、百台くらいのデスクトップのパソコンがフロアー狭しと置かれていた。

ここで職を探すと一回の就職活動と見なされます、と説明会で言われていた。

百十三番の席は、高速道路が見える窓際の席だった。

キーボードで条件をインプットする。

正社員、営業職、三十八歳、月給三十五万円以上。

画面に現れた会社は、住宅リフォーム関係と、生保、損保のファイナンシャルプランナー、要は保険の勧誘員で、学歴不問、やる気のある方歓迎、歩合制月百万円以上可、という会社ばかりだった。 “K大学卒業”という紋所を翳し、毎日通勤するだけで月に三十五万円くれる会社などどこにもなかった。

やっぱり義理兄が言う通り、俺の経歴に合った会社などここには無いんだと諦めかけていたとき、最後のページの一行に目が止まった。

“大輝セミナー”

弁護士や税理士、また国家公務員を目指す人の為の予備校だった。幹部候補生募集

大卒以上 四十五歳位まで

月給三十五万以上”

画面をアウトプットすると、求人申し込みの窓口へ行った。

「山田さん、三人の募集に二十人が応募してきてるらしいんですけどどうされますか？」

係の人が電話を肩と耳の間に挟みながら聞いてきた。

「ええ、お願いします（どうせ大した人間なんか来てないと思いますので）」

電話を切った係の人が、「この紹介状と履歴書を郵送してください。一週間くらいで書類選考の結果を連絡する言ってますので」と言った。

帰り道、退職後すっかり移動の足と化した自転車を漕ぎながらも一度求人票に目を通した。

“ 資本金 一億円 売上高 五十八億円 ”

辞めた会社より二桁低かった。

「どれくらい貰えんのん？」

リビングに入るとすぐに妻は聞いてきた。

「一回目は締め関係でわずかや。」

九日分やから六万ちょつとや。一週間後に振り込まれるって」

「次からは正味貰えんのん？」

「おう。」

それでも十七、八万や。働いてたときの半分もないわ」

「ええやん、もらえるだけ。」

その間にちゃんと次見つけや」

「一つまあまあなんあったから一応申し込んできた。

三人の募集に二十人きてんねんで」

「そんな無理なんちがう」

「アホか。」

ハローワークに募集しに来る人間なんかロクな奴おるか。

俺の履歴書送ってびっくりさせたるか。

おい、履歴書ってどこで売ってんねん？」

「コンビにで売ってんのんちがう」

「写真も撮らなあかん。

どっか知らんか」

「駅前に自動のやつあるわ」

「やつぱりスーツ着て撮らなあかんのかな？」

「当たり前やんか。」

アルバイトと違うんやで。」

「そうか。」

俺ら就職したときなんか履歴書なんか書かへんかったからな。

手ぶらでいいですよ、とにかくお越しください、そんなんやったもんな」

「今は、整形する子もおるんやで、第一印象が大切やからいうて」

「女の子やろ？」

「何言うてんのん。」

男の子もするんやで」

「マジで!？」

みんな大変なんやな」

「みんなって、あんたもその中の一人やねんで」

「アホか。」

俺は、そんな奴らとは人間の次元が違うんや。

会社に頭下げて、どうか入れてくださいって言うのは何の取り柄もない奴がすることなんや。

見といてみ、履歴書が届くやいなや、どうかお会い頂けないでしょうかってすぐに電話掛かってくるわ」

履歴書を送って三日後、本当に「是非お会いしたいのですが」と大輝セミナーから電話が掛かってきた。

「なっ、みてみいな。」

俺はただの失業者やないんや、格が違うんや」

電話があつた日の週末に大輝セミナーを訪れた。

二百人くらいは入れるような大きな教室に、同じ歳くらいの男性が四人背を丸めて座っていた。

みな、会社概要のパンフレットを真剣な面持ちで読んでいた。

（この程度の会社でそんな真剣になるなよ。）

眼鏡を掛けた白髪のいかにも人の良さそうな男性が「お待たせいたしました」と言って教室に入ってきた。

「会社概要を簡単にお話した後、筆記試験を行ない、その後面接を行ないます」とその男性は言った。

予備校を経営しながら、自然食品の販売も行なっていると聞いて不思議に思い、筆記試験で、“あいさつ”を漢字で書くことができず少しシヨックに思い、面接の順番が氏名のあいいうえお順で一番最後だということがわかってうんざりとした。

待っている間、アンケート用紙を一枚渡された。

“煙草を吸いますか？”

「はい」

“今すぐにやめることができますか？”

「いいえ」

“いいえ、と回答された方はなぜですか？”

「やめる必要が無いから」

五回目の大きな欠伸をしたとき「山田様お待たせいたしました」と別室に通された。

会社概要を説明してくれた男性と、彼より少し若い、髪を七三に

分けた男性が目の前に座って俺の履歴書を見ていた。

（すごいやる）

「K大学ですか・・・どうして前の会社をお辞めになったんですか？」

七三の男性が柔和な笑顔を浮かべて聞いてきた。

「ええ、まあ、いろんなことが重なったんですけど、元もと仕事にやりがいを感じてなくて、そこに会社が合併しまして、事実上は吸収されたわけでした・・・」

高木さんへ答えたのと全く同じことを喋った。

その後二人の男性は交互にいろんなことを聞いてきて、最後に、会社概要を説明してくれた年配のほうの男性が「煙草を吸われるんですよね」と聞いた。

「はい」

「禁煙するお考えとかは・・・」

「今のところありません」

「弊社の社屋はすべて禁煙でしてそれをお守りすることは・・・」

「ああ、それは大丈夫です。」

前の会社も全館禁煙でして、どうしても吸いたくなると、会社の前の横断歩道の信号機のもとに置かれてあった灰皿まで走っていつてましたから」

「そうですね、じゃあ大丈夫ですよ」

「はい」

「それでは、もし今日の結果ご縁がありましたら、最後に社長との面接を受けていただきますので、週明けまでにはお返事を差し上げます。今日はどうぞご苦労様でした」

週明けに、社長との面接に来るよう大輝セミナーから電話があった。

「なっ、みてみい。」

この程度の会社やったら百発百中なんや、俺の経歴やったら。

もうこのままこの会社に入るかな。

また、いちいち面接受けたりすんのん面倒くさいしな」

「そうしいよ」

妻は、朝刊と一緒に入っていた求人広告に目を通しながら言った。
「そうしよか、と、言いたいところやけど、俺様がこの程度の会社で働くのはプライドがなあ・・・。」

どうせ組合もないやろうし、有給休暇なんかとるのも一苦労しそうやし、ワンマンな社長に振り回されたりするのが目に見えてるからなあ」

「ええやん、ちょっとくらい辛抱したら。」

家のローンもあんねんから、もう決めてしもたら」

「まあ、その前に、高木さんに電話だけ入れとくわ。」

ちよつとはプレッシャー掛けとかと、なかなか電話貰えそうにないからな」

貰った名刺に書かれていた番号に掛けると女性が出てきた。

「どちらの山田様ですか？」「お勤め先はどちらですか？」「え、無職の方ですか？」

義兄の名前と、辞めた会社名を言ってやっと高木さんにつないでもらえた。

「先日はどうもありがとうございました」

「あ、いえいえ」

「その後如何ですか？」

「あ、まだなんですよ」

「そうですか。」

いえ、私もちよつと時間が経ちましたんで、ハローワークで一社見つけてきまして、週末に最終面接にいくんです」

「あ、そうなんですか。」

じゃあ、見つかりましたらすぐにご連絡いたしますので」

高木さんは忙しいのか、逃げるようにして電話を切った。

「高木さんも、俺の経歴に見合ったとこ紹介せなあかん思て苦労し

てはんねやるな」

「そうかなあ。」

ただ単に、搜してんねんけどほんまに見つかれへんかったりして」
「アホか。」

大輝セミナー程度の会社やったらあつと言う間に最終面接までい
つてるやないか。

高木さんはな、そんな程度の会社やったら吐いて捨てるほど知っ
てるはずや。せやけどこの俺にはそんなとこ紹介でけへん。せめて
一部上場の会社は紹介せなあかんいうて苦労してはと思うで。

まあ、正式に大輝セミナーで内定貰ってから、今度は直接会って
くるわ。結構時間立ちましたしどうしましょって」

「そんなにうまくいくかあ？」

それに、大輝セミナーかつて、まだどうなるかわからんで。

あんたみたいな態度やったら落とされるかもしれんで、こいつ生
意気や言うて」

「アホか。」

もしあの程度の会社落ちたら、もう少し俺も謙虚な気持ちで就職
活動に取り組むようにするわ」

「ほんまかなあ・・・」

妻の予想はまたしても当たった。

大竹と言う大輝セミナーの社長は約束の時間に一〇分送れてやっ
てきた。

「やっぱり大阪は暑いねえ」

大竹はネクタイを緩めながら部屋に入ってきたかと思うと「これ
うちで取り扱っているんだ」と言っ、ミネラルウォーターの入っ
た小さなペットボトルを俺にトスした。

「ご存じだと思うけど、うちは自然食品の販売もやっていて、この
水は本当に良い水なんだ。」

人間はやっぱり健康が一番だからね。

健全な体にしか健全な魂は宿らないから」

そう言った大竹は、長机の向うの椅子に腰を降ろすと書類にじつと目を通した。

「へー、S高校出てんの？」

「はい」

「あそこは進学校だけど、運動も強いよね？」

「はい。」

体操だとかバレーボールなんかは結構有名ですね」

「で、K大学か・・・なかなかK大学なんかいけないよね・・・で、学部は？」

「経営です」

「勉強は結構やった方？」

「いえ、あまりしなかったです」

大竹は首だけを、ああそう、と振ると、しばらく書類に目を落とし何かを考えている様子だった。

「山田さん、自宅はこれ、昔のあの片町線で言っただけ、あの鳴野と言う駅の近くじゃないの？」

「あつ、そうです」

「そうだよな。」

昔、二年だけ、この仕事を興す前に、全然違う畑の仕事の営業やっていた、この辺りに一件お客さんがあったから良くうるちよろしいたんだよ」

「あつ、そうなんですか」

大竹は黒のボールペンを口に加えると自分を納得させるかのように何度か頭を縦に振った。

「わかりました」

わかりましたって、五分も喋っていないのに俺の一体何がわかったんだよ、と思っていると、大竹は初めて刺すような目つきを俺に向けた。

「山田さん、煙草吸うんだよね？」

「はい」

「今すぐやめられる?」

「いえ、今すぐと言われると・・・」

「あっそう。」

じゃあ、もしやめられたら、また言ってきてください・・・」

3

「どういう意味やと思う?」

あのボケ、訳のわからんこと言いやがって」

俺は、ネクタイを外しながら妻に聞いた。

「さあ・・・」

妻は、椅子に乗ってクーラーのフィルターを抜きながら首をひねった。

「良いほうにとったら、入社後煙草をやめられたら俺に言うてきてくれ。」

悪いほうにとったら、煙草がやめられたらもう一回俺の会社受けに来い、そう言うことちゃう?」

「そんなもん差別やんけ」

「“大卒以上” いうのと一緒にやんか」

「アホか、それとこれとは別じゃ。」

俺は別にかまへんで、こんな程度の会社、半分冷やかして受けてんから。」

せやけど、中にはなんとか受かりたい言うて真剣に受けてる人もおるはずや。そんな人らに対して失礼や。煙草がだめやったら最初から求人票に“喫煙者不可” て書いとかなあかんよ。

一回ハローワークに言うたら」

「そんなにムキにならんでええやんか、冷やかして受けてんやつたら。」

「あかん。」

間違っただことをやってる奴にはあんたそれ間違ってるでって言う

たらなあかん。それを言わへんからこの国はおかしなつたんや」

妻の悪いほうの予想がまたしても当たった。

面接から三日後、今度は電話ではなく郵送で返事が来た。

“誠に申し訳ないですが、今回の採用は見送らせて・・・”と書かれた最後に“尚”の続きに“三カ月後、再度ご連絡を取らせていただきます。その時点でお煙草をやめられていた場合、再度社長面接をお受け頂きます”と黒い斜字が印刷されていた。

「何様じゃっ！」

封筒までも粉々に千切つてごみ箱に放り込むと、「おい、ちよつと飲みに行くから金くれ」と妻に言った。

「そんなお金無いよ」

妻はつつけんどんに返してきた。

「あほかっ、まだ退職金残ってるやろっ」

「残ってるけど、もう百万円使ってんで。」

家のローンもあるし、健康保険かって前よりだいぶん高なってんねんから。あんた知らんと思うけど」

「ちよつとくらいええやんけ。」

その退職金かって、俺が働いてもらったもんやねんから、二、三十万くれたってええやないか。

煙草買うから三百円くれ、ビール買うから二百円くれ言うておまえの財布から小銭抜いていくのもうなんか情けないんや」

「しゃあないやん、あんたが選んだ道やねんから」

なにっ、と大声を上げようとしたとき「これだけやで」と言つて妻は千円札三枚を俺の前に差し出した。

つまらないことで喧嘩をするのは嫌だったので、三枚の千円札を分捕ると、自転車のキーをGパンのポケットに入れ、家を出た。

“ビンビール（大）三九〇円”に魅かれて入ったガード下の立ち飲みに毛が生えた程度の居酒屋は、夕方の四時を回ったばかりにもか

かわらず、カウンター席を数席残して人で埋めつくされていた。

注文を取りにきた“研修生”と書かれたバッジを胸につけた二十歳くらいの女の子にとりあえずビンビールを頼んだ。

長年酒を飲んでいるが、ラーメン屋に入ってギョウザをあてに一人ビールを飲んだことはあったが、居酒屋に一人で入るのは生まれて初めてだった。

何か落ち着かない気持ちでメニューを見ていると値段の安さに驚いてしまった。

“冷奴 一五〇円 出し巻き 二〇〇円
まぐろお造り 三〇〇円 ……”

ビールを持ってきた女の子に冷奴とまぐろのお造りを注文した。グラスに入れたビールを半分ほど流し込むと少し気分が落ち着いていた。

周りを見渡すと、さすがにスーツ姿の人はおらず、みな“作業員”と言う感じの人達だった。

冷奴とまぐろのお造りがやってきた。

どちらとも何の表情もない白い器に入っている。

冷奴はほかの居酒屋で食べてきたものよりは一回り小さく、マグロも四切しか入っていなかったが、味は決して負けていなかったし、どちらかと言うと一人で食べるのにはちょうど良い量だった。

ビンビールが空になると、一合二五〇円の日本酒を冷やで注文した。

三九〇＋一五〇＋三〇〇＋二五〇＝一、〇九〇円。

まだ冷や酒を二合飲んで一品頼んでも二千円にいかない。

店を出ると外はまだ明るく、頬が少し火照っていた。

こんな店に自分が入るとは思っていなかった。

というか、馬鹿にしていた。

こんなところで飲むようになったら俺も終わりや、と。

財布を覗くと札入れのところに千円札が一枚挟まっていた。

これまでだったら、営業マンだからと言って急なつきあいに備えて持たせてもらっていたクレジットカードか会社のゴールドカードを持ってキャバクラへ直行と言うパターンだったが、今は立場が違った。

駅前に止めてある自転車を取りに商店街を歩いていると『試写室 九八〇円』という看板が見えた。

そつと扉を開けると、入店を知らせる電子チャイムが鳴った。

「いらっしやいませ」

声のほうを見ると、カウンターの途中で茶髪の若い男性が退屈そうに立っていた。

壁にぎっしりとアダルトのビデオテープが詰まっていた。

「五本まで持ち込めますので」

カウンターの男がぶっきらぼうに言った。

パッケージの女の視線に耐え切れず、適当に五本のビデオパッケージを、スーパーマーケットのカゴを縦横半分くらいにしたカゴに入れてカウンターに持っていくと、茶髪の若い男性は、パッケージから中身だけを取りだしカゴに入れると「九八〇円前金でお願いします。六十分を過ぎますと三十分ごとに五〇〇円の延長料金がかかりますので」と言つて、テレビのリモコンをカゴに入れ「二階の五号室になります」と付け加え、そのカゴを俺に差し出した。

急な階段を昇って二階に上がると、ウナギの寝床のように狭い廊下の両側に扉がぎっしりと並んでいた。

部屋に入り後ろ手でドアの部の鍵を掛けると、リクライニングチェアに腰を下ろし、テレビとビデオデッキの電源を入れた。

煙草に火をつけると、ビデオテープを早送りする音、ビデオデッキからビデオテープを取り出す音、そして時折、人の呻き声の様なものが聞こえた。

ヘッドホンを耳に被せると、再生ボタンを押した。

裸の女が次から次へと出てきて、男達と交わり、そして、汚されていった。

四本目のビデオを見ているとき、我慢できなくなり、そつとティッシュペーパーを箱から抜き取ると、暖かい精液を湿らした。

家意外で自慰をしたのは初めてだった。

何かすごい恥ずかしいことをしたような気になって、テレビと間仕切りの隙間に置かれてあるウエットティッシュの筒から湿ったティッシュペーパーを引っ張り出すと、手を拭い、ビデオデッキからテープを取りだし、灰皿の縁に置いてあった吸いかけの煙草をもみ消すと、逃げるようにして部屋を出た。

外は雨だった。

自転車を止めてある駅前まで歩く間、通り過ぎる人の視線を感じた。

濡れたサドルを手で拭きながら跨ぐと、腰が沈むのを感じた。降りて見てみると、後ろのタイヤが自分の顔のように崩れゆがんでいた。

4

雨の音がセミの泣き声を掻き消し始めた頃妻が起きてきた。

「また寝られへんかったん？」

「おお。」

よう寝た思て起きたらまだ四時や。

あとはいつもの通り、朝まで目えぱっちり寝むれぬ子羊や。」
寝れなくなっていた。

どんなに酒を飲んでも、寝入りはスムーズだが、四時間もすれば目が覚めてしまった。

会社を辞めて疲れなくなったからかと、陽の高いうちに一時間程度汗をしたたらせながら散歩をしてもふくらはぎの裏の筋肉が張るだけで、何の効果もなかった。

「軽いうつ病違う？」

新聞に載ってたけど、定年退職した人がようなるみたいやで。高木さんはもうあてにせんと自分でちゃんと探したら？」

妻の言う通り、相変わらず高木さんからは何の連絡もなかった。

「チビ起さんでええんか？」

「今日から夏休み」

会社を辞めたときはまだ寒かった。

時の流れは止まってくれない。

嫌なことを洗い流してくれる良いところもあるが、彷徨う人間を置き去りにする残酷な一面も持ちあわせていた。

妻が朝刊を取って戻ってきた。

景気が良くなりつつあるという記事が一面に載っていた。

辞めた会社の株価は順調に上がってきている。

妻が苦いコーヒーを出してくれた。

「ハローワーク行くんやろ？」

二回目の失業認定日だった。

「うん。」

まさか二回も失業保険もらうとは夢にも思わなかったわ」

地下鉄に乗るのは久しぶりだった。

土曜日でも日曜日でもないのにTシャツにGパン姿にビニール傘を持っていく姿が窓に映る。

横目で誰か知っている人が乗っていないか確認する。

誰もいないとわかると少しほっとして吊り広告に目を移す。

“転職紹介 一部上場企業多数

(株)ケプトン

お気軽にお申し込みください！”

お気軽にと言うが電話番号がどこにも見つからない。

代わりに、ローマ字やら@やら・・・が横に並んだ暗号のようなものが印されていた。

「どうや？」

すっかり胡麻塩頭になった父が聞いてきた。

「まあぼちぼちやわ。」

ちよつとパソコン貸してや」

周りの乗客に気づかれずに、ハローワークに向かう途中の地下鉄の中で煙草のケースに書き記した文字を打ち込むと（株）ケプトンのホームページにつながった。

「時代も変わったよな。」

履歴書持つて会社訪問する時代なんか終つてもうた」

父がお盆に缶ビールと柿ピーをのせてやつてきた。

「今は、自分の履歴とかどういった条件を希望するのかをこういった仲介業者に登録しといて、見合つた会社があれば紹介してくれる、そんなふうになってるんや」

二十分ほど掛けて全てのインプットが終つた。

「パソコンがなかったら就職もでけへん時代や」

昼間から飲むビールはうまかつた。

「おまえもパソコン買えよ。」

父が言つた。

「ええよ。」

あんなもんな定年退職した無趣味のおっさんが残りの人生の時間潰しに使うおもちゃやがな」と言いかけて、まさに父がそのおっさんに該当するとわかつて口をつぐんだ。

「なんやつたら買つたるか？」

「ええよ、どうせ使うの今だけやから。」

会社決まつたら使うことなんかあらへんから」

二人で五本の缶ビールを開け「ちよつと寝むたなつたから」と父が居間に消えるともう一度パソコンに向かつた。

電子メールを開けた。

パソコンは嫌いであり得意ではなかったが、辞めた会社で、電子メールだけは、上司からの指示やお客さんからの注文が入つてきたのでしょうがなく毎日見るようにしていたので、使い方はわかつていた。

“送受信”をクリックすると一通のメールが届いているのがわかった。

父に失礼して開けてみると、(株)ケプトンからだった。

「ご登録有り難うございます。」

早速ですが一度ご来社の上・・・」

お盆の上にこぼれている柿ピーの柿の方を口に放り込んだ。

(株)ケプトンはオフィス街の真中の大きなビルの中にあつた。

デスクトップ型のパソコンが置かれてある応接室と言うよりはブースと言ったほうがいい部屋で待っていると、電子メールに書かれていた、弓岡、と言う名前の人が「お待たせいたしました」と言って入ってきた。

弓岡さんは、歳が三十くらいの女性で、バリバリのキャリアウーマンと言うよりは、婚期を逃しつつある事務職の女性、と言う感じだった。

「すばらしいご経歴で」

弓岡さんの第一声だった。

「どこかほかにご登録されている会社がありますか？」

「いえ、御社が初めてです。」

「そうですね、山田様のご経歴ですと、すぐにお決まりになると思いますので、できれば弊社のほうでご紹介させていただきたいと思っていますので・・・」

「いえいえ、そんな大したことはないです、それにもうええ歳ですから」

「そんなことはないですよ、まだ三十八歳でしたら大丈夫ですから」

この時、この「大丈夫ですから」と言う言葉の意味を深く考えなかった。

「消費財系のメーカー営業をご希望と言うことで」

「はい」

「まあ、山田様のご経歴ですと、問題はないと思うんですけど、

「ご存じの通り消費財系のメーカーは元もと求人があまり多くはないですし、それに関西全体があまり元気がないものですから」

弓岡さんは高木さんと全く同じことを言った。

「以前の会社のご経験を活かすと言うことは？」

「まあ、正直、あまりやりがいを感じていなかったもので、できれば異業種でと考えています」

「そうですね」

ただ、キャリアアップというお考えで、以前より更に条件の良い企業をお探しになると言うことで・・・

「そうですね、それでしたら・・・」

「では、そちらのほうの登録もしてまいりますのでしばらくお待ち頂けますか」

良ければこのパソコンでご検索できますので、条件に合った会社があるかお調べください」

弓岡さんは笑顔を残して部屋を出ていった。

マウスに手を伸ばす。

画面には、確かに一部上場企業の名前がこれ見よがしに並んでいる。

“掲載企業 1847社”

検索条件をインプットする。

『正社員』『事務・営業職』『大阪府』

『六百万』『大学卒』『三十八歳』

《この条件で検索する》をクリックする。

しばらくすると、“検索結果”が画面に現れた。

ご希望条件を満たす企業・・・24社！？

何か検索条件のインプットを間違えたのかと思い確認したが何も間違えてはいなかった。

24社の中身を見ていくと、ほとんどが、住宅関係の個人営業で、簡単に言えば、飛び込み営業の完全歩合制、学歴不問、あなたの頑張り次第で月収百万円以上可、といった、以前ハローワークで見た

内容の会社ばかりだった。

検索条件から『六百万』を抜いて、もう一度《この条件で検索する》をクリックした。

「ご希望を満たす企業・・・32社。

増えた8社は、前の24社と同じような会社で、一部上場の“いの字もなかった。

とっておきの会社はどこかに隠しているのかなと思っていて弓岡さんが戻ってきた。

「お待たせいたしました。

素材メーカーの方も登録してまいりましたので、担当は森中と言うものがさせていただきます」

「わかりました」

「あと、山田様、メールアドレスのインプットが漏れておりましたので・・・」

「いえ、パソコン持ってないんですわ。

登録は、父のパソコン借りてやったんで。

まあ、家がすぐ近くなんでいつでも借りに行けますので。」

「そうなんですか」

弓岡さんは一瞬人を馬鹿にしたような笑みを漏らした。

「では、ご紹介したい会社がありました場合は？」

「ファックスでお願いします」

「承知いたしました。

後ですね、ご存じかと思えますけど、弊社ではないんですけど、スカウト制と言うものがありまして、ご経歴を登録されておきますと、それを見て興味を持たれた企業様からスカウトの声がかかるというものなのです。

山田様でしたらいくらでもお声がかかると思えますので登録だけでもされておいたほうがいいと思われます。まあ、うちとしましてはそちらで決められると困るんですけど」

そう言っただけで笑った弓岡さんの作り笑顔を見て俺は（株）

ケプトンを後にした。

次の日、図書館で本を読んでいると早速（株）ケプトンから電話があった。

弓岡さんではなく、担当と紹介された森中さんからだった。

「場所は梅田で、従業員数が約五十名。前職のご経験が活かせると思うんですけど」

「上場はしてないですよね？」

「ええ」

「今出先なんで、申し訳ないですけどファックス入れといてもらえますか」

家に着くと、妻が「なんかファックス来てるで」と机の上の紙を指差した。

アルバイト始める

一枚は手書きの書面で森中さんの挨拶と条件に見合った会社が見つかりましたのでご検討願いますと言う内容で、もう一枚はその会社の求人票だった。

従業員五十人、資本金一億円、年商五十億円、年収四百五十万円、五百万、年間休日百五日、組合なし。

「申し込むだけ申し込んだいたら」

「うーん、この程度の会社じゃなあ・・・」

「やっぱりその程度の会社しかないんやて」

「アホか。」

もう一人の担当の人は俺くらいの経歴やったらなんぼでもええところあるわって言うてたわ」

「お世辞やんか。」

向こうからしたらあんたは一応お客さんやねんから。

お客さんに向かつて、あんたこれやったらどこも決まりませんわって言わへんやろ。」

次の日、また森中さんからファックスが来た。

辞めた会社で昔担当していた、町の小さな問屋だった。

「ええん違うの。」

社員の人も知ってる人ばかりやし、どんな仕事してんのかもわかってんねんから」

「下手に知ってるから嫌やねん。」

まあ、社長で迎えてくれるんやったら考えてもええけどな」

森中さんに断わりの返事を入れようかどうか迷ったが、向こうから何か言ってくるまで待とうと思い、辞めた。

結局、この日以降、？ケプトンからは一切連絡が来なくなった。

「なんかメールが来てるぞ」

父の電話に、ちょうど昼御飯の時間で一人で行くのがバツが悪かったので娘を自転車に乗せ、実家に飛んで行った。

「なんか、スカウトが来ました、て書いてあるで」

あわててパソコンの電源を入れ電子メールを開いた。

「あなた様のご経歴を拝読し……」

外資系の損害保険会社からだった。

「何や、保険の勧誘員か。」

何が、五百人の中から三十人だけに声を掛けさせてもらいましたや、片っ端から声を掛けてるくせに」

「そんな贅沢ばかりもう言うてられへんやろ」

娘に目を細めながら、父が、声だけを掛けてきた。

「これだけはあかんわ。」

俺の同期も何年か前に会社を辞めて、同じ様な会社に入ったけど、結局は、同期の俺らに保険入ってくれ言うて頭下げて回ってたからな。

あんなカツコ悪いことだけはしたくないわ。

あんなんするんやったら、家族みんなで飢え死にしたほうがましや」

「こんなかわいい子、飢え死にさせるんか」

父は娘の頭を撫でながら部屋から出ていき、代わりに母が入ってきた。

「なかなかうまくいかへんのん？」

「うん。」

ひよっとしたら、もう、歳かもしれへんなあ」

「せやけど、あんた、K大学出て、あっちこっちいろんな会社辞めたんとちゃう、一つの会社ですっと働いてきて、何も悪いことして辞めたわけやない、自分からいろいろ考えて辞めたんやから大丈夫なんちゃうの？」

「俺もそう考えとつたんや。」

せやけど、世間はどうもそうやないみたいやわ」

俺は会社を辞めて初めて、弱音を吐いた。

「そら雇うほうから考えてみたら、同じ一から教えるんやったら、まだ頭の柔らかい、人件費の少しでも安い人間雇うわな。」

自分では、三十八言ったらまだまだ若い思ってたけど、新たに就職しようと思ったら、もうリミットを超えてるかもしれんわ」

この、母に言っただ言葉が、やがて、現実であることを思い知らされることになった。

人材派遣業では日本のトップクラスを誇り、毎年行なわれるマラソン大会のメインスポンサーを務め、選手のゼッケンの上に社名を大きく刻むその一部上場の会社は、梅田のど真中の高層ビルの中にあつた。

エレベーターを降り、受付へ行くと、会社を辞めて半年足らずで7kgも太ってぴちぴちになったスーツの上着のボタンが、胸の高なりで弾け飛びそうなくらい綺麗な受付嬢が「お待ちしております」と言つて、小さく区切られたブースに通してくれた。

すぐに古田と言う、三十歳前後の男性がやってきて、丸いテーブルを挟んだ向かいに腰を下ろした。

名刺には“キャリアアドバイザー”と書かれていた。

「山田さん、退職されたのが二月の末で、半年が経過しておりますが、どのような就職活動を行なつてこられましたか？」

「ええ、実は、まあ、コネ言つたらおかしいんですけど、ある方に紹介をお願いしておつたんですけど、どうも当初思っていた通りに話が進まなくてですね、二カ月前くらいから自分でも動くようになつたんです」

「これまで何社ほどお受けになりましたか？」

「一社です」

「一社？」

「はい」

「それは何でお調べになつて？」

「ハローワークです。」

「良ければ、どちらで？」

「大輝セミナー言う、弁護士だとか会計士を目指す人が通う予備校みたいなところすわ」

「存じています。」

「そちらは営業で？」

「はい。」

最終面接までいったんですけど、煙草吸うから言つて落とされました。訳のわからん会社ですわ」

古田は俺の言うことを無視して続けた。

「今お受けになつている会社は？」

「ないです」

「そうですか」と言つて、古田は腕を組み、手元の資料を見ながらうんうんと首を振つた。

「山田さん、こんなことを言つては何なんですけど、お考えを変えていただかないと、少し厳しいかも知れませんか」

古田の言う意味が良く分からなかった。

「山田さん、転職を希望している二十代の男性が内定をもらつまでに受ける会社の平均数をご存じですか？」

「（そんなもん知るか）いえ」

「十四社なんです。」

それにこういつては何ですけど、山田さんは、今、三十八歳ですよね。」

「（それがどしてん？）ええ」

「全ての求人のうち95%が、三十五歳以下の方を対象としているんです。と言うことは、残りの5%から山田さんは仕事を見つけなければいけないんです。」

「（おまえ、俺の経歴書見たんか？ その辺の失業者とは訳が違うんやぞ）そんなんですか」

「ですから、言葉は悪いですけど、下手な鉄砲じゃないですけど、
どンドン応募していかないと・・・途中で気に入らないのなら断つ
てもいいんですよ、面接に行つて話を聞くだけでも何かの足しにな
ると思いますので、とにかくたくさん応募するようにしてください。
ちよつと、ご条件に見合つた会社を検索してきますのでしばらく
お待ちください」

言い残すと、古田は慌てるようにして去っていった。

「味噌もクソもいっしょにするなよ。」

俺は、その辺で物乞いするようにして会社探してる人間とは訳が
違んや」

吐き捨てるように一人ごち、全面ガラス張りの向こうに見えるス
モッグで煙る大阪の街並を見下ろした。

「一度見てください」

息を切らして戻ってきた古田は紙の束を俺に渡した。

「なかなか消費財系のメーカー営業と言うのは求人自体少ないんで
すよ。あまり固執しないで、“営業”と言う括りでお捜しになった
ほうがいいと思います」

さすがに、飛び込み営業の歩合制の仕事や保険の勧誘員といった
ものはなかったが、おつ、と目を見張るようなものもなかった。

「如何ですか？」

「うーん、まあ、一回帰つてからよう検討しますわ」

「お受けになろうと思う会社がありましたらご連絡ください。お待
ちしておりますので」

「古田さん」

俺は古田に声をかけた。

「はい？」

急に声を掛けられて、古田は少し驚いた表情をした。

「古田さんのお仕事ありますよね、このキャリアアドバイザーって
いの、こついののはどうですかね？」

実際に、パソコンを使った会社検索で、よくこういった人材派遣業を目にした。大卒以上、四十歳くらいまで、未経験者歓迎と言った文字が踊っていた。

「営業経験が長いですから、こうやって初対面の人間と話すのも苦ではないですし、実際に転職を経験しているわけですから、その人の気持ちになつて話ができると思うんですよ」

「うんー、難しいと思うんですけどねえ」

「（おまえ、嘘でもええから、いいんじゃないですかと言えんのか）条件も合つてると思うんですけどね」

「退職してからの期間が長引けば長引くほど条件が悪くなりますから、まあ、どうしてもとおっしゃるんでしたら一度お受けになられてもいいかと・・・」

「（何やその言い方はっ！ 受けても通らんで言うんか？ おまえよりもっと俺ははきはきと明るく喋れるし、相談に来た人に希望を持たせて帰らせてあげれるぞ。よしっ、内定取つておまえの鼻明かしたるやないか。どうせつまらん私立の大学出て、面接で心にも思てないこと言うて媚び諂つてなんとかこの会社に潜り込んだんやろが。おまえとレベルの違うとこ見せつけたろっ！）わかりました、色々と有り難うございました」

席を立つと頭も下げずにブースを出、受付嬢の顔をもう一度だけ覗くと、エレベーターに乗ってビルを下りた。

翌日、朝から実家へ行きパソコンの前にかじりついて、全部で七社の人材派遣会社に応募した。

中には、資本金一千万、年商十億、従業員数十二名と言う会社があつて、何でこの俺がこんな会社を、と思つたが古田の鼻をとにかく明かしたかったので、迷つた挙げ句“応募する”をクリックした。

ところが、七社全ての会社が不採用となつた。

それも全てが面接にも進めず、書類選考で落ちたものだった。

もちろんその中には、資本金一千万、年商十億、従業員数十二名

の会社も含まれていた。

あとでわかったことが、未経験者歓迎というのは、二十代の若い未経験者、を言うのであって、四十歳くらいまで、と言うのは、経験のある四十歳、のことを言うのであった。

「やっぱりプロの人が言うことは正しいやんか。」

言う通り、業種は選ばんと、下手な鉄砲数撃ったら」

妻が野菜炒めの入った皿をテーブルに置きながら言った。

6

娘の夏休みも終わり、残暑の厳しさがやっと過ぎ去りかけた九月の終わりになっても、俺は家でぶらぶらしていた。

就職活動は、雇用保険を貰うためにハローワークでのパソコンを使った求人検索に二回行っただけで、それ以外は何もしていなかった。

何かしなければいけないと思うのだが、どこかで、傷つけられたプライドが更に傷つけられるのを恐がっているのか、どうしても腰が重くなった。

朝刊を読みながらいつもの苦いコーヒーを飲んでいると妻が出かける準備をし始めた。

「どこ行くねん？」

「ハローワーク」

手鏡を手に、目をパチクリさせながら妻が言った。

「ハローワーク？」

何しに行くねん？」

「パート捜しに行くねん。」

前から働きたいと思っててんだけど、いい機会やから。」

「なんや、嫌みか？」

「半分な」

「チビは大丈夫なんか？」

「午前中だけのやつ捜してくるから」

「そうか」

「ちよつと、帰りに買い物行ってくるから昼御飯は勝手に食べといてな。カップラーメンやったら台所の棚の一番下にいっぱい入ってるから」

「おう・・・すまんのう」

カップラーメンを食べながら昼のワイドショーを見る。

月曜から金曜までの日替わりで出てくるレギュラー人のタレントの名前を全部覚えてしまった。

さつきまで見ていた、アメリカ大リーグの松井が所属するヤンキースの打順もすべて覚えてしまった。

一カ月はあつと言う間に過ぎていくが、一日は長かった。

妻が晩酌用に買った缶ビールを冷蔵庫から取ってくるとプルトゥッブを開けた。

外で飲む機会がめつきり減った、と言うか、ガード下の安酒を飲む以外はゼロだった。

財布の中には小銭しか入っていない。

妻に小遣をくれとはもう言えなかった。

貯金の残高を言われるのがオチだった。

テーブルの上に置いてある朝刊のテレビ欄の下に、消費者金融の広告が載っている。

最近市民権を得た“グラビア”と言う職業の女の子の口から吹き出しが出て、その中にお気軽に相談ください、といった文字が納まっている。

「頼むからサラ金だけは行かんといてな。

お金なくなったら言うんやで」

会社を辞めてから、母は俺の顔を見る度に言った。

駅前に自転車を止めると、店の前を三回往復した。

トレーナーの下シャツに汗が滲んでいるのがわかる。

通りを歩いている人の視線全てを感じた。

四回目にも前を通ったとき、風に吹かれるようにして店に入った。

“自動契約コーナー”と書かれた扉を押す。

液晶画面の指示に従い、画面横のスキヤナーの上に免許証を置きカバーを下ろすとまぶしい光を発して俺のデータを読み取った。

“備え付けの用紙に必要な事項をご記入の上、液晶画面の上に裏向きにお置きください”

液晶画面が喋る。

途中、職業を記入する欄があったが、自営業、と記入し、社名は（有）ヤマダ、電話番号は自宅と同じ数字を、月収は三十万と記入した。

液晶画面に用紙を置く。

スキヤナーがゆっくりと下りてきて用紙をなぞった。

しばらくすると壁に備え付けてある電話が鳴った。

“ご利用有り難うございます。”

何点かご質問したい点がございますが、お時間のほうは大丈夫でしょうか？

「大丈夫です」

「ありがとうございます。」

早速ですが、山田様、本籍地はどちらになりますでしょうか？」

「大阪です」

「ありがとうございます。」

で、ご自宅は、こちらはマンションでよろしいのでしょうか？」

「そうです」

「ありがとうございます。」

分譲でしょうか、それとも賃貸でしょうか？」

「分譲です」

「ありがとうございます。」

お差し支えなければ月々のご返済額をお教え頂けないでしょうか？」

「毎月だいたい八万円くらい。ボーナスで約三十万返してます」

「ありがとうございます。」

あと、お仕事のほうなんですけど、自営業とのことですが、簡単にどのようなご商売をされているのか教えていただけますか？」

「樹脂関係の二次流通って言うか、ブローカーって言うか、町の問屋さんとか小さい商社さんと、最終のユーザーさんとの間に入って利ザヤを稼ぐ、まあ、伝票だけの商売で、物も造ってませんし、もちろん在庫も持っていません。」

今年の三月に十四年間勤めていた会社を同僚と一緒に退職して始めた商売なんですけど、まだまだ軌道に乗らなくて生活費がちょっと足りないもんで・・・」

「ありがとうございます。」

なお、今後、毎月のご利用残高ですとか色々なお知らせのDMをご自宅に送らせて頂きたいと思っているのですが？」

「いえ、それは結構です」

「承知いたしました。」

もし緊急なご用件がありました場合、ご連絡はご自宅にさせて頂いてよろしいでしょうか？」

「いえ、携帯のほうにお願いします」

「かしこまりました。」

それと、大変不躰な質問なんですけど、ご近所にお身内の方はお住まいでしょうか？ 決して確認を取るようなことは致しませんので」

「父親が住んでいます」

「お名前を頂戴頂けますでしょうか？」

「宏です」

「ありがとうございます。」

それでは、最後になりますが、山田様、ご本人の確認をさせていただきます。

干支と星座は何になりますでしょうか？」

「羊年のお羊座です」

コンビニのCD機は、いとも簡単に一万円札十枚を吐き出した。自己破産者が年々増えていくのも無理はないなと思いつながら、借りた金なのに何か得したような気分になって、コンビニの向かいのパチンコ屋へ意気揚々として入っていった。

二時間で三枚の一万円札が無くなった。

店の前から辞めた会社の元部下の携帯に電話を入れる。

「ああ、どうもご無沙汰してます。

お元気ですか？」

電話でそう言った元部下は、待ち合わせの場所で顔を見るなり「太りましたねえ」と第一声を上げた。

競馬で万馬券を当てたと嘘を言って、寿司屋に入り、カウンターで腹いっぱい飲み食いした後、久しぶりにキャバクラへ行った。

トレーナーにGパン姿の俺と、スーツ姿の元部下の組み合わせに、横に座る女の子が変わる度に「どういう関係なんですか・・・」と聞かれ、いちいち説明するのに疲れたが、二時間たつぷりと楽しみ、勘定を全て持った。

恐縮がる元部下に「おまえ達が働いてくれるから俺が雇用保険をもらえるんだっ」と通りを歩く人の注目を浴びるほど大きな声で叫び、前を通りがかったタクシーを止めると「無理言つて悪かったな」と一万円札を握らせ、車を走らせた。

財布を開けると一万円札はなく、五千円札と千円札が仲良く肩を寄せあっていた。

結局、最後の失業認定日の十月の二週目の月曜日までに消費者金融からの借り入れは三十万を超えた。

急に羽振りの良くなった俺を妻はまったく疑わず、一度聞かれたときは、辞めた会社の労組の積立金が満期になって返ってきたんだと嘘をついた。

「今日多分残業やと思うからあの子帰ってくるまで家におったって

な。

月曜日で四時間授業やから二時までには帰ってくるから」

ハローワークの帰りにパチンコに行こうと目論んでいた俺は、「えっ」と意外そうな声を出した。

「それくらいええやんか」

珍しく不機嫌そうに言った妻の髪の毛の生え際に白髪が目立ち始めていた。

「退職金もうあんまり残ってないで。ボーナス月のローンも待ってんねんから、そろそろ本腰入れて仕事探すか、アルバイトにでもいつてや」

それだけ言うと妻は忙しそうに出ていった。

「この間ようさん申し込んでたんはどうなったんや」

散歩に出かける父が、玄関から声だけを掛けてきた。

「あかん。

全部アウトや。

それも、書類選考で全部はねられた。」

「そうか。

まあ、はよ決めて奥さん安心さしたりや」

父が出ていくと、母がずっと待っていたかのようにやってきた。

「うまくいかへんのん？」

「うん。

なかなか俺を必要としてくれるところがないわ。

まあ、それはそれで別にかまへんねんけどな」

「ほら」

母が手で、マウスを握っている俺の右腕の肘を突いた。

「お父さんには内緒やで」

母親の左手には封筒が握られていた。

「そんなんええて、まだ金もあるし」

「かまへんから、はよなおしとき。」

サラ金なんか行つてへんやるなあ？」

「大丈夫やつて」

検索された二十社の中から、本社が福井県にあるカニ加工品販売会社、三年前に一度倒産し、外資系の銀行に助けてもらつて復活したスポーツ用具メーカー、テレビでコマーシャルをよく見かける介護業界で日本NO1の会社、一部上場のベアリングメーカーの100%出資子会社、大手スーパー専門の食品品質管理会社、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社、飛び込み営業はまったくないとうたった会員制のリフォーム会社、に応募した。

家に戻ると、妻がしかめっ面をしながら肩に湿布を貼っていた。

「おう、ご苦労さん。」

「どしたんや、肩こつたんか？」

「一日中パソコンの前に座つてデータ入力してたから、もう痛くて痛くて。」

「あの子は？」

「友達のとこへ遊びに行つたよ」

「あんたは？」

「パチンコ打ちに行つてたんや、つて嘘や。」

「あんたが働いてくれてんのにそんなことしてたら罰当たるわ。」

同じ“うつ”でも、下手な鉄砲撃ちに行つてたんや。」

妻は、はあ！？、と言う顔をした。

「おやじんとこ行つてパソコン叩いてきたんや。」

「営業と言う名の付くやつに全部応募してきたわ。」

「これであかんかったら、ほんまタクの運ちゃんでもするわ。K大
学出のタクシー運転手言つてドキュメンタリーでどつかのテレビ局
が追っかけてくれるかもしれんわ」

「あんたには無理やわ。」

「色んな客がおんねんで。」

特に夜になったらほとんどが酔っ払いやで。そんな人らになんか文句でも言われたら、あんたのことやから“この俺様に向かつて何を吐かしてるんや”言つてすぐに喧嘩するに決まってるやんか」

「アホか。」

こう見えても俺は結構サービス業に向いてんねんぞ。愛想もええし、第一お客さんに向かつて「ありがとうございまして」て言うのが好きやから。学生の時でも、時給のええ塾の先生や家庭教師のアルバイトなんかK大学やからいくらでもあつてんけど、あえてサービス業のバイトばかりやつててんから」

「アルバイトと正社員はまた違うつて。」

それより、もううまくいって、その申し込んだ会社内に定もらうとなつたらどれくらいかかんのか？」

「そら、書類選考に一週間から二週間、一次面接があつて最終面接があつてなんやかんやで一ヶ月くらいはかかるやろな」

「その間何すんのん？」

「そやな、昼まで寝て、起きたらパチンコ行つて、勝つたらそのまま飲みに行つて、負けたら家でヤケ酒飲んで・・・」

「アホか、何言つてんのん！」

「冗談やつて。」

そんなムキんなるなよ。

ちゃんとアルバイトにでも行こうと思てんねんけど、どんなところ行こかなと思つてな。

この歳になつて、肉体労働はもう無理やし、会社の内定が取れるまでの間だけ働かせてください、内定取れたらすぐに辞めますので、というワガママ聞いてくれるとこなんかないやろ」

「短期のやつ行つたらええねん。」

一日だけとか一週間だけとかつていうのがあるから」

「そんな都合のいいやつあるか？」

「ちよつと私の鞆取つて」

確か三年くらい前の誕生日に買つてやったかなり疲れた一応ブラ

ンド品の手提げ鞆を渡すと、妻は中から筒のように丸めた薄い冊子を取りだし俺に渡した。

「その中にいっぱい載ってるわ。」

“短期”のページ開けてみい」

言われた通りそのページを開けてみると『短期歓迎、一日から可』
と言っ言葉がたくさん踊っていた。

「今は昔みたいに働く所に直接申し込むんやないねん。」

仕事を紹介してくれる派遣業者にいったん登録して、そこから色んな仕事を紹介してもらうねん」

「正社員になるのもアルバイト見つけんのもシステムは同じやねんなあ」

「業者は紹介した会社から紹介料を貰えるし、働く人らも一回働いてみてイヤやったらまた別の仕事紹介してもらえるし、良かったらそのまま続けたらええし、どっちにとっても利点があるんよ」

「世の中変わってんなあ。」

それより、なんでおまえそんなん持つてんねん」

「スーパ―の前に置いてあつたん取つてきてん」

「ただなんか？」

「そうやで」

「えっ！？」

俺ら学生の時確か百円したはずやで。よう買ったがな」

「スーパ―の前とか、自動販売機の横とかに置いてあんねん。百円取つて本屋にしか置かれへんより、ただにして色んな人の集まる所に置かしてもらったほうがいいんちゃうの」

「そうか・・・で、おまえ、まだ別のところで働くんか？ あんまり無理すんなよ」

「違っよ。」

今のともええねんけど、パソコンも私らん時よりようなつてんのか知らんけど、データ入力する前に操作で覚えなあかんことが多くな。

もうちょつと単純な、お弁当の盛り付けとかみたいな仕事探そう
と思て」

「そうなんか。」

「やっぱり、俺ら、もう歳なんやで」

その事務所は、天王寺駅から歩いて十分ほどの雑居ビルの中にあ
った。

化粧つ気のない二十歳くらいの国公立大学生風の女の子が二人、
男は、二人のうち一人は学生でもないが社会人でもないフリーター
風と、もう一人は、自分より少し若い、コンビニの店長といった感
じの男、の四人が説明会に来ていた。

五人は、仕事の予約から給料を受け取るまでの一連の流れを分か
り易く説明したビデオを見せられた後、登録書を渡され、早く書け
たものからカウンターで待っているまだ二十歳になってないんじゃない
のかと思われる髪の色茶色い女の子のところへ行った。

「今のビデオで何かご質問はございませんか？」

仕事は、働きたい日の二日前に電話で予約を入れる。一回で二週
間分の予約を入れることができる。

ところが、ここからが面倒臭く、仕事の前日に、間違いなく明日
行きますと確認の“前日コール”を入れ、仕事の当日、朝、家を出
る前に“出発コール”集合場所に着くと“到着コール”そして仕事
が終わると“終了コール”を入れなければいけない。

携帯電話から事務所の電話に掛けるので電話代も馬鹿にならず、
おまけに、勤務地までの交通費が日給七千二百円の中に含まれてい
て、更に、日払いを希望する場合は、給与は勤務地で貰えず、わざ
わざ交通費をかけ天王寺のこの事務所まで取りに来なければいけな
いどころか、一勤務につき“データ処理手数料”と称して二百円取
られてしまう。

時給九百円があつと言うまに八百円になってしまう。

こんなこと一言も求人雑誌に書いてなかったやないか、と文句を

言おうと思ったが、いい歳をしてこんなところへ来ていざこざを起し、更に惨めな気持ちになりたくなかったので、やめた。

「とくにないです」

「それでは、先にスタッフカードをお渡ししておきます」

入ってきたときに真つ先に渡した免許証用の証明写真を貼り付けた、レンタルビデオ屋のメンバーズカードのようなものを渡された。

「今お仕事は？」

「今年の二月に十四年勤めた会社を辞めまして、今就職活動中です。次の会社が決まるまでの間の繋ぎ言ったら怒られるんですけど・

・

「いえいえ、では、ほかにアルバイトかなにかは？」

「やってないです」

「わかりました。」

では、短期ということによろしいですね？」

「はい」

「なにかご希望の仕事とかはありますか？」

「まあ、この歳なんで、あんまりハードな仕事は無理やと思うんで、そうですか、ではこういったのはどうですか？」

“到着コール”を掛け終え、地上に出ると、一目でこれから同じところで働く奴らだとわかる輩達が、会社へ向かうスーツ姿の人たちから、おまえら何の団体や？と言う目で見られながら屯していた。

しばらく、辞めた会社の得意先が近くにあったので、知った人がいないか辺りを警戒していると、自転車に乗った、耳にピアスをしてキャップを斜めに被りずり落ちたジーンズから下着を覗かせている若い男の子がやってきて「こっちです」と小さな声を出し、みんなでたらだとその後を付いていった。

二つ目の信号を渡り左に折れると、その製本会社の建屋が姿を現した。

「本の検品とラベル貼りですから、そうきつい仕事ではないと思う

んですけど」

天王寺の事務所の女の子が言った言葉を思い出しながら、派遣されてきた会社ごとに置かれた用紙に名前を書くと、いったんその建屋から出、向かいにある二回りは大きい建屋に入っていた。

五階にある更衣室まで階段で上り、少し息を切らせたまま薄い綿のジャンパーだけを脱いで、また階段で三階まで下りた。

“現場の主”といった六十くらいの鬼オコゼの様な顔をしたおやじが、回りを陣取った俺達をぐるりと見回し、一番恰幅のいい男の子を指差すと「おい、おまえこっちこい」とえらそうに言っでどこかへ連れていった。

「じゃあ、あんたらはこっち来て」

おそらくは鬼オコゼの子分であろう三十くらいの、丸坊主頭に片方の耳にだけピアスをした男が俺達を手招きした。

木製のパレットの上に山と積まれた高校受験のための参考書の束をほどき、赤のカバーと青のカバーとのものに分ける作業だった。

一束は、B4の大きさと厚さ一センチくらいの参考書二十冊で構成されていた。

少し重かったが、目の前の木製の机に降ろすと、PPバンドをカッターナイフで切って束をほどき、赤のカバーと青のカバーのものに分けて積んでいくだけの作業だった。

はっ、と壁に掛けてある時計を見ると、作業開始から一時間が経過していた。

これならなんとかやっていけるな、両肘に筋肉の張りを感じながらも俺はそう思った。

昼休みになり、片道十分を掛けてコンビニでお握りとお茶を買い戻ってくる途中、ズボンのポケットにいれていた携帯電話が震えた。液晶の画面に映った番号は天王寺の事務所からだった。

「山田さんですか？」

「はい」

「お仕事大丈夫ですか？」

「あつ、ありがとうございます。」

「なんとかやれてますんで。」

「そうですか。」

「じゃあ、またお昼から頑張ってください」

電話を切ろうとした女の子を俺は止めた。

「明日まで予約入れてあるんですけど、あと木曜と金曜も入れてもらえますか？」

「わかりました。」

予約状況を見ますのでしばらくお待ちいただけますか」

しばらくして、大丈夫です、と言う女の子の声を聞いて、急ぎ足で俺は元来た道を戻った。

ところが、慌てて食べたおりぎりの塩味を舌の上に残しながら職場へ戻ると、とんでもないことが待ち受けていた。

鬼オコゼが俺に声を掛けてきた。

「ちょっとこっち来い」

誰にえらそうに言うтонじゃ。

思っていると、エレベーターに寄せられ、二階で降りた。

「流れてくるやつを二つ重ねてもらって、正面に“理科”って言う文字が来るようにしてください。あと、端をきれいに合わせてください。梱包の時にずれたりしますんで」

鬼オコゼから後を継いだ人の良さそうな三十くらいのお兄ちゃんが丁寧に説明してくれた。

ラインの前に立ってみる。

五年生の理科の教科書の束が流れてきた。

掴む。

重くない。

束を重ねる。

“理科”！？

慌てて乗せたほうの束を掴もうとしたが、指がうまく間に入らず教科書の山を崩してしまった。

「そんなあせらんでいいですよ」

もう一度、止めたラインを動かしてもらおう。

今度は“理科”が正面に来た。

五回に一回“科理”になったが、だんだんと慣れていった。

三十分もすると鼻歌が出るようになった。

しかし、理科の教科書は次から次へと流れてきた。

おまけに朝から立ちっぱなしで、ふくらはぎの裏が激しく張ってきた。

慣れないときは時間の立つのが早かったが、慣れてくると、何回壁に掛けてある大きな時計を見ても、時計の針はほとんど動いていなかった。

そして、五時の終業のチャイムが鳴ったとき、五分のトイレ休憩を一回はさんただけでずっと同じ位置に立ったままの両足と、日本中の五年生の理科の教科書の束を掴んだのではないかという腕と言うよりは十本の指は硬直して動かなかった。

フランケンシュタインのようにして五階の更衣室まで上ると、朝一緒に来た連中は、ずっと同じとこにいたのか、俺のようにどこかのラインに立たされていたのか知らないが、みんな何事もなかったかのようにけろっとした顔をしていた。

翌日、事態は更に悪化した。

昨日一番最初にやっていた、高校受験のための参考書の束を解いて赤いカバーと青いカバーに分ける作業をしていると鬼オコゼが声を掛けてきた。

「おまえ、四階に上がれ」

四階でエレベーターを降りると、目の輝きを失った小柄な三十歳くらいの男が手招きした。

「どんどん流れてくるんで後ろのパレットに積んでいって」
ラインの上に本の束が置かれている。

本は、家でよく妻がお菓子を食べながら読んでいる、厚さ5センチ

チはある通販のカatalogで、一束はそれが5冊で構成されていた。

元もと手の小さい俺は、束を掴むだけでも一苦労だろう。

それをラインから降ろし、後ろのパレットに積んでいかなければいけない。

握力はすでにゼロに等しかった。

更に悪いことには、ただパレットに積んでいけばいいのではなく、フォークリフトで運ぶときに荷崩れを起こさないようバランスよく積むため、一段ごとに束の向きが違い、それを覚えなければいけない。

ラインが流れ出す。

束をなんとか掴む。

パレットに下ろす。

束がやってくる。

掴む。

下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

束。

手に力が入らない。

「こらっ、早よせんかいっ！」

束。

掴む、下ろす。

束。

掴む、下ろす。

「おいっ、方向が違っやろっ！」

束。

失意の中で

三階に降りると、鬼才コゼが哀れみの目で俺を見る。

「続きやっというて」

堆く積まれた赤いカバーと青いカバーの参考書の周りには誰もいなかった。

妻に造ってもらったアルミホイルに包んであるおにぎりを震える指でなんとか食べ終えると、建屋を出て携帯電話を握った。

「あつ、山田さんですか？」

天王寺の事務所の女の子が俺の声を聞いて明るい声で答える。

「申し訳ないけど、急に面接が入ってしまったんで、昨日せつかく取っていたいた明日と明後日の仕事キャンセルしていただけますか？」

「そうなんですか・・・残念ですね。
わかりました。」

但し、山田さん、前日のキャンセルは本来はお受けできないんですけど、今回は初めてだということでお受けしますが、今後はご注意ください」

「（もう二度と電話なんかすることないと思うけど）わかりました。
無理言うて申し訳ないです」

「お昼からも頑張ってください」

「ありがとうございます」

この子の声ももう二度と聞くことはないんやろなと思い、電話を切った。

「どうやったん？」

「あかん。」

もう体が動かんわ。

やっぱり俺はスーツを着て働く人間や」

「明日はどうすんのん？」

「行かへん。」

もうキャンセルしてきた。

なんか別のんまた探すわ。」

「別のんて、短期いうたらこんな日雇いみたいのしかないよ。」

明日また派遣会社に電話して、体がきつかったからもう少し楽なやつないですかって聞いてみいな」

「アホか。」

そんなん言うたら、明日と明後日のやつキャンセルしたのん、体がきつかったからって嘘ついたんばれるやんけ」

「そんな見栄張ってる場合ちゃうやんか。」

あと銀行の残高どれだけあるか見たるか」

「そう怒んなよ。」

わかったから、とりあえず今日は早よ風呂入って寝かせてくれ。

あとはまた明日からちゃんと考えるから」

「ほんまに考えんのかいな」

「ほんまやつて。」

それより、入浴剤あるかな。ようテレビでやってるやんか、たまった疲れが取れるってやつ」

「そんなないよ。」

第一、人との温度差のわからん人間に入浴剤の効用なんかわかるわけないわ」

7

駅の階段を上る太股とふくらはぎの張りはかなりましになった。

しかし、十本の手の指の張りはまだしつこく残り、切符を買ったとき財布の中から小銭を取り出すのに苦労した。

受付で名前を告げると「そちらでお待ちください」とソファアを

指差された。

グループで申し込みに来たのか二十歳くらいの女の子達がきちゃつきゃつきゃつと言って楽しそうに話していた。

喫煙室と書かれた紙が貼ってある部屋を見つけたので胸のポケットに手をつ突っ込んだとき「六十二歳ですけど大丈夫ですか？」と男性の声がした。

Gパンにジャンパー姿の俺と違い、きれいに折り目の付いたスラックスにブレザーを着た小綺麗な男性だった。

説明会の会場に入る。

スーツにネクタイ姿の男性が何人かいる。

景気が良くなってきたと言っているがほんまなかと思いいながら説明を聞く。

時給七百五十円、夜勤でも千円には満たない。

「せやけど、あんたにはちようどええで。

葉書とか封筒くらいやつたらか弱いあんたでも持てるやろ。

それに、期間も一ヶ月やし、夜勤やから、昼間に面接とか入っても大丈夫やんか」

妻はそう言っておれにこの仕事を勧めた。

説明会が終わると、簡単な面接が行なわれた。

履歴書も職務経歴書もない。

「山田さんは今何かお仕事を？」

スーツの下にチヨツキを着たいかにも公務員といった感じの俺と
同い年くらいの男の人が聞いてきた。

「いえ、二月に会社を辞めまして、今、就職活動中です」

「そうですか。」

今回は郵便物の仕分けでご応募頂いたんですけど、車での集配業務は如何ですかね？」

「いえ、あんまり車の運転が好きでないんで」

「そうですか、わかりました。」

もし、お知り合いでどなたかご紹介頂ける方がいらつしやいましたら是非お願いいたします」

チョッキは申し訳なさうな顔をして頭を掻いた。

「あと、以前にアルバイトか何かでこちらでお勤めになられたことは？」

「ええ、もう二十年くらい前ですけど、家の近くの郵便局で一度やったことがあります」

「そうですか。」

「じゃあ、大体どういったものかというのはご存じですよね？」

「もうだいぶ前ですからね」

「いちおう、採用の前に、四時間くらいの実地訓練を行ないますので、平日の午後とかは大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「配属される部署によつては十キロくらいの荷物を積み降ろししていただくことがあるんですけど」

手に通販力タログの重みが蘇った。

「もう歳なんですね、できたら避けていただきたいですね」

「わかりました。」

それと、夜勤ですので、週に三日程度の勤務になると思うんですけど、場合によっては残業をお願いしたり、誰かが休んだ代わりに急きょお休みのところを出ていただくことをお願いすることがあるかと思うんですけどそれは？」

「大丈夫です。」

出来るだけ対応できるようにします」

「ありがとうございます。」

おそらく、年末が近づくと何度か無理をお願いするケースが出てくると思いますので。

それと、期間なんですけど、十一月の中旬から十二月の中旬ということなんですけど、もしもう一ヶ月延長をお願いした場合は？」

「まあ、決まっていなかったら本当は困るんですけど、次に勤める会

社が決まっていなかったら続けさせてもらいます」

「ありがとうございます」

そう言ってチョッキはもう一度頭を掻いた。

「一週間から十日の間に結果のほうはご連絡させていただきま
すので」

「よつぽど人手がないみたいやで」

スエットに着替えながら妻に言った。

「せやけど、重たいもんは持ちたくないとか贅沢言うてたら、こ
ら使もんにならん言うて・・・」

ここまで言って、妻は、しまったと言う顔をした。

製本会社でのアルバイト以来、俺は、使い物にならない、と言
う言葉に敏感になっていた。

「アホかつ！」

ほとんど喧嘩腰だった。

「集配業務はできませんか？友達を紹介してただけませんか？残
業をしていただけませんか？期間を延長してただけませんか？

今日にでも来てもらいたい状況やぞ。

もしあかんかったら、ほんまに俺はこの世の中から必要とされ
てへんて認めて死んだるわいつ！」

電話が鳴った。

「お義父さんから」

妻が子機を俺に渡す。

「なんか面接の日時をお知らせしますっていうメールが何件か来
てんぞ」

応募していた会社のうち、倒産から復活したスポーツ用具メー
カーと、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社、それ
と会員制のリフォーム会社から、書類選考に通ったので面接を受け
に来い、という知らせが来た。

「あんだ文句言つてたけど、あのなんとか言う派遣会社の人の言う通りやんか。

やっぱり、派遣会社の、なんとかアドバイザーなんか、あんだの歳で受けても無理なんやん。

最初から、普通の営業職受けといたら良かつてん」

言いながら妻がテーブルに置いた野菜炒めを見た娘が「またおんなじや」と言った。

「よっしゃ、今週の土曜日エキスポランド行こか」

やったー、と言つて娘は喜んだ。

俺も一緒に、やったーと言つて喜びたかった。

やっと運気が巡ってきた、そう思うと、いつもは、妻の顔を伺いながら冷蔵庫から取り出していた缶ビールを、当たり前のように取り出し、勢い良くプルトップを引いた。

8

駅から十分ほど歩いた、雑居ビルに毛の生えた程度のビルの中に、会員制のリフォーム会社の事務所はあった。

エレベーターを降りると、その会社名に大阪出張所と付け足された白いプレートの貼られた扉をノックした。

「面接に参りました山田と申します」

十坪もない、事務所と言うよりはブースと言ったほうが良さそうな狭い事務所の間仕切りの向こうからスーツ姿の男性が「お待ちしております」と言つて出てきた。

名刺に課長補佐と書かれたその男性は、辞めた会社の役職も同じなら、歳も同じ位だった。

「どうぞお掛けください」

椅子に腰を下ろすと間仕切りとの間に隙間はなかった。

「会社の概要ですか仕事の内容などは募集要項を読まれているとんどご存じかと思いますが、もう一度こちらのビデオを見ていただいてご確認ください」

下手な鉄砲を数撃つのに忙しく、ほとんど募集要項など読んでいなかった俺はその三十分程度のビデオを真剣に見た。

「だいたいご理解頂けましたでしょうか？」

「ええ」

「何かご質問とかは？」

「会員さんは大体どれくらいいらっしゃるんですか？」

「約五万世帯です。」

年間会費を三千円頂いていますので、それだけでも一億五千万円になります」

「へーっ、すごいなあ。」

せやけど、それだけの数の会員、どうやって集めたんですか？飛び込み営業は一切無いって書かれてましたけど」

「各家庭で処分できなくて困っていた不用品を一律二千円で引き取ったと言っか買い取ったんです。」

そうしたら、皆さん大変有り難がっていただきましたよ、いや実はリフォームもやっているんです、会員制なんですけど、と言いますと、じゃあ入らせていただきますと気持ち良く言っていたきまして」

「うまいっ。」

そのやり方は誰が考えはったんか知りませんが、うまいやり方ですわ。

うちにもこわれたテレビが長い間ほったらかしになってるんですけど、引き取ってもらおうと思ったらお金掛かるし、無料で引き取ってくれるっていうチラシが入ってたんで電話したら、お宅の機種は古すぎて引き取れませんって言われるし」

「リフォームといっても、いきなり何百万や何千万もするリフォームをさせてくださいって言うのではなく、会員様が台所の水道の蛇口の締まりが悪くなったと言われれば飛んでいって修繕し、お年よりの方が蛍光灯が切れたけどもう椅子に乗って取り替えるのが恐いと言われれば、すぐに行って取り替えてあげる。そうやって信頼を

得て、じゃあ家のリフォームもお願いしようかしらって言うてもらえるように努めているんです」

「なるほどね。」

それはうまいやりかたですわ。

せやから、飛び込みの営業は一切無いって書かれてたんですね」
「そうです。」

ですから、どちらかと言えば、攻めの営業と言うよりは守りの営業と言った感じですね。

会員様のご要望に忠実にお答えし、その中から新たなビジネスチャンスを見つけていく。

もちろん新規開拓も大切です。

但し、こちらからお声を掛けるといよりは、不用品の回収依頼のお声を掛けていただくとすぐに馳せ参じる。

とにかく、お客様の声に忠実に答えることですね」

「いや、正直なところ、リフォーム会社言ったら、最近色んなことがあったから、なんかうさん臭いinchやうかなと思ってたんですよ。」

せやけど、お話を聞かせてもらったら、そんなん全部吹き飛びましたわ」

すがすがしい気持ちだった。

久しぶりに他人といっぱい喋った。

やっぱり営業マンは喋ってなんぼや、そう思った。

駅ビルの地下で、コーヒー付き七百五十円の日替わり定食を食べ、地下鉄を二駅乗り継いで、三年前に一度倒産したスポーツ用具メーカーの説明会が行なわれるビルにたどり着いた。

ビルはオフィス街のど真中にある大手生命保険会社が保有する二十五階建てのビルで、さっきのリフォーム会社が入っていたビルとは雰囲気が大きく違った。

説明会会場に入ると、二人掛けの長机が縦に六列、横に三列並べ

られており、空いている席は一番後ろの真中の机の二席だけだった。席に着いて前を見渡すと、最近若ハゲの人が増えてきたとは言え、全体の三分の一以上の人の頭の頂きが寂しい状態になっていた。

「予想以上のご応募のため説明会を開かせていただきます」

ネットにそう書かれていたのを思い出した。

昔は、テレビコマーシャルも流れていて、もし、街中を歩く人に聞くとほとんどの人が社名を知っていると答える企業とはいえ、三年前に一度倒産、破綻した会社である。

だから、先方も“予想以上”と言う言葉を使った。

テレビを見ていると、やたらと閣僚の先生方が「平成不況は今踊り場にさしかかっている」と言っているが本当だろうか。

踊り場にたどり着いたとしても「日本」と言う建物自体がずぶずぶと地盤沈下を起こしているような気がしてしょうがなかった。

説明会が始まった。

同じ年くらいの男性がOHPを使いながら、たどたどしく会社概要を説明する。

「昨日の夕方、いきなり、明日大阪へ行って会社説明会で喋ってくれて言われましたので、一部聞き苦しいところがあると思いますがご了承ください」と言って緊張した空気を解きほぐしてくれたその男性は、辞めた会社の同期入社だった竹井を思い出させた。

“竹井”は、三年前に会社が倒産したことを少し苦笑いを浮かべながら説明し、その後かなりの苦労の後、アメリカの融資会社の支援を受けてなんとか会社として復活することができたと述べ、会社概要の説明が終わると具体的にどんな仕事をしてもらうのかを説明し、最後に「私入社以来ずっと人事畑を歩いてきて営業活動はやったことが無いんですけど、やりがいはかなりある仕事だと思います」と結んだ。

簡単なアンケート用紙を配られ記入していると“竹井”が「もし本日面接をご希望される方がいらっしゃいましたらこの後受付させていただきます。但し、誠に申し訳ありませんが、本日私を含めま

して担当させて頂く人間が二人しかおりません。それに、人使いのかなり荒い会社でして、今日中に必ず東京の社のほうに戻ってこいと言われている関係」会場に笑いが起きる。「今二時を回ったところですから、そうですねえ、六時のぞみには乗りたいと思いますので、あ、すいません、細かいこと言って」また笑いが起きる。「五時までとして三時間、お一人三十分として六名の二人いるから十二名、そう、誠に申し訳ありませんが、十二名の方のみ本日面接をさせていただきます。但し、来週のこの時間に二回目の説明会をここで行ないます。今度は社長とまでは言いませんが、いる人間をとにかく引つ張り出しますのです」またまた笑いが起きる。「どうしても今日でないと都合が悪い、妻が来週出産予定日なんです、という人以外はできませんでしたら来週でお願いします」

皆笑ったが、俺は笑わなかった。

通るかどうかも分からない会社を受けるのに、往復四百六十円も掛けてまた同じところになんか来たくもなかった。

慌ててアンケートに答える。

しかし、皆、説明会の時から少しずつ書いていたのか、一人、また一人とアンケート用紙を裏向け席を立つ。

『今回の説明会の感想を自由に書いてください』

“……感動した……”

どこかの国の首相の受け売りを殴り書くと、周りの目など気にせず、ドタドタと出入口に向かって突進した。

「二時間以上お待ち頂くことになりますけど……」

「大丈夫です」

一つだけ空いていた喫煙席に腰を降ろすと煙草に火を着け携帯電話でメールを打つ。

面接受けて帰るわ、六時頃になる

窓の外をスーツ姿の人が足早に通りすぎる。

この世界にまた戻って来たいなあ……。

ビルに戻り、喫煙ルームで煙草を吹かしていると“竹井”が「山田さんですか？ 長い間お待たせいたしました」と言っ

部屋に入ると意気なり「竹井」は「山田さん、こんな大きな会社行ってどうして辞めたんですか？」と聞いてきた。

「まあ、色々ありまして……」

後はいつも通りの回答をした。

「そうなんですか・・・いやあ、もったいないなあ・・・どうですか就職活動のほうは？」

「いやあ、思った以上に苦戦してます。」

「歳なんか、ほとんどが書類選考で落とされますわ」

「えーっ、そうなんですか？」

K大学を出られて何社も渡り歩いているわけでも無いし」

「いやあ、やっぱりもう三十八歳いうのはダメなんですよ」

「そうかなあ・・・いや、私も山田さんと同級生なんですけど、本当にそんなものですかね・・・」

「（嘘やと思うんやったら一回会社辞めてみはったら）そんなもんですよ」

そのあと面接は“竹井”とのたわいない会話に終始し、面接と言うよりは、喫煙室で久しぶりにあった同期入社の人間との立ち話、という感じだった。

「来週の面接が終わってから選考を始めますので、二週間ほどで結果をお知らせします」

「これ、郵便局からのやつ」

妻は机の上に封筒を置いた。

「どうする、もつゝ飯食べる？」

「いや、今日は喋り疲れたから、先ビール飲まして」

妻は箸とカレイの煮つけの乗った皿を持ってきた。

「どんな感じ？」

「まあ、あんなもんやろな。」

どっちとも同じ歳くらい、片一方なんか同級生やったよ、面接してくれた人が。

気持ち良く喋れたし、俺の気持ちもわかってくれたんちゃうかな」

「あんだ、馴れ馴れしい喋ったんちゃうの？」

なんぼ歳がいつしよくらいやから言うても、向こうはあくまでも面接官やねんで。

あんたは試験受けてる受験生やねんから、その辺わきまえて喋らんと、なんや馴れ馴れしい奴やなって思われるで」

「アホか。」

営業マンは喋ってなんぼやねんど。

初対面の人間と会うても、なんやかやなしに喋って、その場を取り繕わなあかんねや」

「それはそうやけど、やっぱりある程度わきまえんと。」

もしあんたが面接官やったらどう思う」

「黙っておどおどしてる奴よりはマシやと思うけどな・・・」

「そうかなあ・・・」

9

「あんたじゃ話ならへんわ、責任者と代わってくれ」

巡ってきたと思われた運気は、いとも簡単に逃げ去った。

すいません、今ちよつと席を外してるんですけど

「じゃあ、その次の人と代わって」

そういったものはいないんですけど・・・

面接から十日掛かってきた郵便局からの回答は“採用”だった。働く期間が十一月中旬からではなく十二月中旬からになっていた。

「そらお宅らにもな、人を雇うほうの都合ってのがあると思うけど、こっちはこっちで働くほうの都合ってのがあるんや。いつまでにこ

れだけの金がほしい、だから探して面接受けに行くんや。まだ俺の場合はなんとか生活やりくりして凌ぐけど、中には、あんたここで働いたお金を年末からの旅行のお小遣いに充てようと思つてた人がおつたかもしれんぞ。そんな予定が全部狂つてしもつて、へたしたら旅行に行かれへんようになってあんたら訴えられるかもしれないぞ」

ですから、予定以上の応募があつたものですから・・・

「それやつたらそれでもつと早う連絡頂戴なあ。

人の人数くらい十〇分もあつたら数えられるやろ。

それやつたら、こんな無駄な十日間過ごさんと、次の仕事探せたんや。

おまえらそんなんやから民営化されるんじやつ!!

このボケがつ!!」

「そんな大きな声で怒らんでもええやんかつ。

周りの家にもまる聞こえやでつ!!」

ベランダで洗濯物を干していた妻が慌てて居間に戻ってきた。

「アホかつ!!

世の中、なんか、おかしなつてもうとるんじやつ!!」

更に、その十日後、本社が栃木県にあり、社長の来阪にあわせるため一番最後になつていた、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する派遣会社の面接を受けに行くためマンションのエレベーターを降り、いつもは滅多に開けない、エントランスホールにある郵便受けを何気なく開けると、大きな封筒が二つ入っていた。

駅に向かつて歩きながら封を開けると、それぞれの封筒から、履歴書と職務経歴書が出てきた。

それらと全く同じ内容が書かれた真新しい履歴書と職務経歴書の入った鞆に放り込むと、赤信号の横断歩道を煙草に火を着けながら渡った。

「お待たせしました」

ここ何年すっかり珍しくなった、若い女性社員に入れてもらった熱い緑茶を飲んでいると、五十歳くらいの恰幅の良い男性が、間仕切りで仕切っただけの応接室に入ってきた。

名刺に書かれてある“取締役社長”という文字に背筋が伸びる。

「もったいないねえ」

社長の第一声だった。

「滋賀県にも工場ありますよね」

「はい」

辞めた会社の話だった。

「今はないですけど、昔は結構な人数を入れさせてもらってたんですよ」

「そうなんですか」

「今でも結構入ってますよね？」

「ええ。」

私もずっと営業やってたんですけど、納期トラブルとかでたまに現場へ行ったら、日本人の作業員探すのによろ苦労しましたから」

「よく働くんですけどねえ、まだ平均するとしても日本人よりは・・・」

「そうなんですよね。」

中には日本人より優秀な人もいて、検査ライン一つ任されてるような人もいたんですけど、今社長さんがおっしゃられたように平均するかどうか・・・よう現場の係長が愚痴こぼしてましたね」

「だから、うちも少しでも質の良い作業員をと思って色々やっているんですけど、まだなかなかうまくいかないところがあるんですよ」
「栃木にも工場があったんですよ」

引き続き辞めた会社の話。

「そっちは滋賀の工場とは桁違いにブラジルの方が多くて、昼間の食堂なんかは日本人よりブラジルの方のほうが多くて、食堂の自動販売機のコーラが一日で売り切れる言うてよ売店の人間が笑って言

うてました」

「一年働いたら、帰っていい暮らしができるんですからね。そりゃ頑張って働きますよ」

「残業が無かったら文句言うって言うてましたからね。」

それに、笑い話ですけど、休みの日にソフトボール大会を開いたらしいんですよ。親睦を深めようということ。お弁当付き、飲みものはジュース、ビールのみ放題。そしたら、集まってきたんはブラジル人の家族ばかりで日本人の家族はほとんど来なかった。急きょソフトボール大会がサッカー大会に変更になったらしいんですよ」

「ははっ。」

昔とは違いますからね。

休みの日まで会社の人間の顔は見たくないっていう気持ちもよくわかりますけどね。

国が豊かになることって本当に良いことなのか考えさせられますね」

社長は湯飲みに口をつけた。

「で、山田さんは、東京でのお仕事の経験もあるんですね？」

「はい、三年だけですけど」

「もう一度向こうでつてのは如何ですか？」

「うーん、できたら避けたいですね」

「そうですね。」

で、山田さん、この大阪のご自宅は賃貸ですか、分譲ですか？」

「分譲です」

「お子さんは？」

「娘が一人います。小学校二年生です」

「山田さんねえ・・・」

社長はもう一度湯飲みに口をつけた。

「ご家族皆さんで向こうへ移るっていうのは？」

「ちよっと無理ですね。」

娘の学校の問題もありますし、どうしてもとなったら単身赴任です
ね」

「そうですか・・・いえ、山田さんねえ、やっぱり関西、特に大阪
はかなり冷え込んでいるんですよ。

せいぜい、三重が少しましなくらいで、今一番元気な名古屋か、
それかやっぱり関東へ行かないとダメなんですよね。

うちもこうやって大阪に事務所を構えているんですけど、正直仕
事はさっぱりなんですよ。ですから、できれば栃木のほうでやって
もらえないかなと思っているんですけど・・・」

ここで、じゃあ頑張らせていただきます、といえは採用が決まっ
ていただろう。

「単身赴任もいいんですけど、子供さんもまだ小さいし、まだまだ、
お可愛いでしょ？」

違う土地に行って新しい仕事を始めるとなると色々のご苦労があ
ると思うんですよ。

そんなときにそばにご家族の方がいるのといないのでは違うと
思うんですよ。

だから、もし行ってもらうとなるとご家族皆さんで行ってもらい
たいんですよ」

言つと社長はうーんという顔をして俺の履歴書と職務経歴書を睨
み付けた。

「山田さん、営業にこだわらずに、総務だとか人事とかでもかまわ
ない？」

「はい、経験は少ししかありませんけど」

もう一度社長はうーんと唸った。

「やっぱりね、山田さん、大阪に固執すると難しいですよ。うん、
難しい」

最後は自分に言い聞かせるようにして社長は言った。

「たまには外へ食べに行かへん？」

妻はいつもの「どうやったん？」の代わりに言った。

「金あんのんか？」

「お好み焼き食べるくらいのお金やったらあるよ」

店に入ると、まだ時間が早いせいか客はほかに誰もいなかった。娘は久しぶりの外食にはしゃいでいる。

「ビール一杯だけ飲ましてな」

ソースの焦げた匂いがたまらなくいい。

家族三人でお好み焼きをつつく幸せ、今まで思ったことなんかなかった。

「ええ社長さんでな、色々と話さしてもらったんや。

結構評価はしてもらったと思うんやけど、たぶんあかんと思うわ。

もう大阪に固執するのはあかんかもしれんわ。

真剣に、単身赴任で名古屋とか東京へ行くことを考えんな」

「この前受けたとこの返事は来たん？」

「あかんかった。

今日、履歴書と職務経歴書戻ってきたわ。

ええ感触やってんけど、あんたの言う通り、あまりにも馴れ馴れしく喋りすぎたかもしれんな。

謙虚さが足りんのかな？」

四日後、メーカーの現業部門にブラジル人を派遣する人材派遣会社から、履歴書と職務経歴書が送り返されてきた。

「もうほんまにこの世の中から必要とされてへんかもしれんな」

妻は何も言わなかった。

「ちよつと散歩行ってくるわ」

財布の中を見ると千円札が二枚あったのでいつものガード下の飲み屋に向かった。

一時からやっている店は、まだ二時を回ったばかりだったが満員の一步手前の賑わいを見せていた。

十二月の下旬並の寒さになると気象庁が予想していた通りの寒さになった中を二十分ペダルを漕ぎ体が冷え切っていたので、ビールはパスして二合の熱燗と、おでんの厚揚げと大根を頼んだ。

途中のコンビニで煙草を買ったついでにとってきた無料のアルバイト専門の求人誌を開く。

一カ月間だけの仕事などは皆無で、短期と言えば、やはり、仲介業者に登録して仕事を紹介してもらうものばかりだった。

熱燗を流し込む。

ポツと胃の中で熱の花が開く。

“マンガ喫茶

18歳〜35歳位まで

22:00〜5:00

時給950円

週3、4日勤務できる方

短期可”

「ちょっと電話してくるんで」

通りがかった店員に声を掛ける。

ありがとうございます。

マンガ喫茶ポエム、谷崎でございます

「あのお、求人誌見て電話させてもらったんですけど、三十八歳なんですけど大丈夫ですか？」

はい、大丈夫です。

失礼ですけど、今何かお仕事のほうは？」

「二月に会社を退職しまして、現在就職活動中なんです」

わかりました。

勤務は週に何日くらい可能ですか？」

「そうですね、もう歳なんで、三日か頑張って四日くらいだと思っ
んですけど」

ありがとうございます。

期間は長期でしょうか？」

「いえ。」

次の仕事が見つかるまでの間だけお願いしようと思ってるんですけど」

それは大体どれくらいの期間になりますか？

「そうですね、うまく見つかったとしても今からだと最低一ヶ月は掛かると思うんですけど」

それはちよつと無理ですねえ。

短期といつても、最低三ヶ月は勤務していただかないと、やっと慣れてきたと思ったときに辞められるとうちとしましても

「そうですか・・・」

誠に申し訳ないですけど、また、お願いいたします

店に戻ると、残っていた熱燗をあおりもう一本追加した。

厚揚げと大根で二合徳利を三本開けて店を出ると、陽がすっかり短くなつた晩秋の空はわずかな星をちりばめ、黒く塗り固められていた。

さすがに、サドルにまたがりペダルを踏むと、自分ではまっすぐ進んでいるつもりが、自転車は右へ右へと逸れて行き、傍らを歩く通行人にぶつかりそうになりブレーキを握る。

目敏くその様子を見つけた客引きの若い男が駆け寄ってくる。

「キャバクラどうつすか。」

五十分四千円、飲み放題ですよ」

無視して俺はペダルを踏む。

男はついてくる。

「可愛い子ようさんいますよ。」

五十分だけどうですか？」

男は俺の腕を掴んだ。

「邪魔じゃっ、ボケっ!!」

俺は男を一喝し、その声に通行人全員が振り返った。

「なんやおっさん!!」

男は俺の腕を離し、今にも殴り掛かってきそうな形相だったが、すぐに他の同業者の男達が飛んでやってきて止めに入った。

「調子のんなよっ、こらっ、いつでもシバいたんぞっ！」

俺は男にメンチだけを切ると、サドルに尻を降ろし、またペダルを漕ぎ始めた。

最寄りの駅の一つ手前の駅まで戻ってきたとき、久しぶりに興奮したのと、酒の飲み過ぎとで喉がカラカラになり、自動販売機でペットボトルに入ったスポーツドリンクを買った。

一気に半分ほど飲み干し、もう一度蓋をして自転車の前カゴに放り込むと、とぼとぼと自転車を押して歩いた。

大きな黄色い電飾看板が見えてきた。

“ビデオ”

何年か前に一度だけ入ったことのある、アダルトビデオやアダルト雑誌を売っている店だった。

『アルバイト募集』

20歳～35歳位

時給：800円

お気軽にお申し込みください』

「酒臭ーっ」

妻は居間に入るなり大きな声を出した。

「どんだけ飲んできたんよ」

「アホか。」

二千元で飲める量なんかしれてるわ」

「それにしてもすごい匂いやで。」

「ご飯どうすんのん？」

「いらん」

娘が哀れみの目でこっちを見ている。

「もう寝るわ、蒲団敷いて」

「生命保険の会社からなんか電話あつたで」

妻が居間のとなりの寝室に入り、押入から蒲団を引っ張り出しながら言った。

「なんて？」

「切り替えの時期が来てるんで、中身見直してくださいって。」

「一回来て説明したい言うてたで」

「あの人らも歩合制やから必死なんやろなあ」

「また明日電話するって」

「あっそう」

「蒲団敷けたで。」

「齒くらい磨いて寝えや」

「もうええわ、そんな力残ってないわ」

「そんなんしてたら、しまいに娘にも嫌われるで、父さん臭いー言うて」

「アホか。」

「そんなこと言わへんよな」

「と言つて、娘を見ると」

「父さんはなんの仕事してんのん？」

「いきなり娘が聞いてきた。」

「今日学校で先生に聞かれたから、毎日家にいますって答えたら、先生が、夜のお仕事なんかあつて言うてた」

「そうか。」

「そしたら、もうお父さんは死んだ言うとけ」

「アホなこと言いなや」

蒲団を敷き終えて寝室から出てきた妻が俺の腕を掴んだ。

「もう酔っ払いは早よう寝え」

無理矢理蒲団に入れた俺は「おいっ」と声を上げた。

「ほんまに死んだほうがええかもしれんなあ。」

このまま、うまいこと次働くとこが見つかつても、給料はちよつとしかもらわれへんし、たとえ六十まで働けたとしても、中途採用

やから退職金もしれてるやろうから、おまえらにはええ生活させてやれんからなあ。

それやったら、もし今死んでみ、マンションのローンはチャラになるし、保険金も確か四千万くらいは入ってくるはずやから、おまえもパートとしながらやったら二人でなんとか暮らしていけるやろ。それか、もうちよつと、五千万くらいに保険金増やしとこか？」

「増やしてくれんのは有り難いけど、あんまり毎月の保険料高なつたらしんどいで」

「よっしゃ、それやったら一回生命保険のおばちゃん呼んで色んなシミュレーションやつてもらお」

「はいはい、わかったからもう寝え」

妻が寝室の襖を引くと、俺は掛け布団を被り、すぐに深い眠りに落ちた。

10

師走に入った。

夜は相変わらず眠れず、毎日と言っていいほど、辞めた会社の間が夢の中に現れた。

特に、反りの合わなかった上司が多く、腕を組んでこつちをじつと見ている。何か言ってるやろうと思うが言葉が出てこない。そのうち上司は何も言わず姿を消してしまう。

就職活動は相変わらず何の進展もなく、ほとんどが書類選考で落ち、面接に進んでも、一週間以内には必ず履歴書と職務経歴書が戻ってきた。妻に言われる通り言葉づかいにも気を使い謙虚な気持ちで望んでもた。

「山田さん、やっぱり歳なんですすよねえ」

そう言われればまだ納得はできるのだが、ただ“残念ながら今回は貴殿の希望に添えることができず・・・”では何かすつきりしなかった。

また、履歴書と職務経歴書を封書で返してくれるところはマシな

ほうで、パソコンで“残念ながら・・・”の一言だけを送ってくる
ところ、もつとひどいところになると、履歴書と職務経歴書を送れ
といっておきながら、その後、何の返事も寄越さないところがあっ
た。ダメなのかどうなのか、ひよつとしたら何かのアクシデントで
封書が届いてないんじゃないのかと心配してしまう、そんな非常識
な会社もあった。確かに、結構な数の書類が届いて、処理をするの
も大変だろうが、自ら募集しておきながら、相手に対して何の返事
もしないというのはどう考えても非常識だ。やはり、封書にて返送
するのが常識だと思うのだが、そんな非常識な会社にすら入れない
俺が言うと負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

アルバイトも「次の会社が決まるまでの間なんですけど」で、全
て断られた。

消費者金融からの借り入れも上限の五十万円まで後二万円に迫り、
緊張感の無い毎日を送る中で、体重は生まれて初めて七十キロを超
えた。

生命保険のおばさんはどうしても成績をあげたかったのか、十一
月の最後の日に家にやってきて、一ヶ月の保険料がこれまでより三
千円上がるだけで、死んだときの保険料が四千万円から四千五百
万円に増える契約を俺から取り付け、スキップして帰っていった。
「今日も多分残業やから家におったってな」

妻は娘が学校から帰ってくる時間に合わせて午後一時までだった
パートの時間を、午後四時まで延ばし、残業も進んでするように
なった、というか、せざるを得なかった。

「どう、どつか脈のありそうなどこあんのん？」

忙しそうに化粧をしながら妻が聞いた。

「あかんわ。」

一部上場の企業なんか夢のまた夢、それどころか、インターネッ
トで募集してるところでもあかん。もう、新聞の広告に載ってるよう
なとこしか無理ちゃうかな。

今年はもう就職活動は終わりや。

なんぼやつても一緒や。

叩けど叩けど、大きな扉の向こうからは誰も出てけえへんわ」

「もう一回高木さんをお願いに行ってみたら。もう、どこでも入れるとこやったら行かせてもらいますって」

「そんな恥かきなことができるかよ」

「ほんま、年越されへんかってでも知らんで」

妻は言うと言っていった。

片側三車線の大きな道路を跨いで店を見る。

昼間だから“ビデオ”の看板に明かりは点いていなかったが、店は開いている。

あたりに目を配りながら横断歩道を渡る。

父親の散歩コースにもなっているの、もう一度前後左右を確認する。

採用

ゆつくりとペダルを踏みながら、店の前を通りすぎる。

アルバイト募集の紙はまだ貼ってあった。

しばらく行くと、誰も見ていないのに、あつ！と、何かを思い出したかのような芝居をすると、回れ右をして、来た道を戻った。

都合よく、店の扉の横に煙草の自動販売機があった。

財布から小銭を取り出しながら、横目で電話番号を暗記する。

自動販売機から煙草を取り出すとき、もう一度最後の確認をした。店から離れると、すぐに道を折れ、財布の中にしまっておいた小さな紙切れに電話番号を記入した。

「すみません、アルバイトの件で電話させてもらっただけですけど、三十八歳でも大丈夫ですかね？」

「あのう、申し訳ないんですけど、私アルバイトなんでその辺わかってないんですよ。社長は夜十時を回らないと来ないんで、お名前とご希望の曜日とかを書いてもらう用紙があるんで、それを書きに来てもらえますか？」

「夜八時頃でもかまいませんか？」

「はい」

「わかりました。」

「じゃあ、行かせていただきます」

「あのう、お名前は？」

「山田と申します」

「俺も落ちるとこまで落ちたなあ。」

Hビデオ屋でアルバイトやって。

K大学まで行かせた親泣くで、ほんまに」

「お父さんには言わんほうがええで」

「わかってるよ。」

おやじはまだしも、母親が聞いたら、ただでさえ体調悪いのに、口から泡吹いて倒れよんで。

駅前の本屋でつてことにしとくからあんたも話し合わせといてな」

約束の時間に店の扉を押すと、すぐ脇にカウンターがあつた。

「今日お昼にアルバイトの件で電話しました山田です」

「はいはい」

背が百九十センチはあるかと思われる二十代後半くらいの男性が愛想よくカウンターの奥から出てきた。

「じゃあ、こちらの用紙に記入していただけますか」

もともと下手くそな字が、緊張して、ミミズが這つたような字になつてしまつた。

“職業”の欄で一瞬手が止まつたが、自営業、と書くと「これでいいですかね？」と男性に用紙を渡した。

「はいはい、これで結構です。」

そうしましたら、社長に渡しておきますんで、二、三日のうちに電話が入ると思います。あつ、電話は自宅と携帯どちらがいいですか？」

「携帯のほうにお願いします」

しかし、四日たつても五日たつても、その社長さんから電話は掛かつてこなかつた。

「Hビデオ屋まで落ちたんかなあ」

「やつぱり歳がネックなんちゃうの」

「せやけど、三十五歳“位”やで」

「何か重たいもん持つ作業とかあるん違うの？」

「レジ作業だけやと思うで」

「そんなことないん違う。」

商品の搬入とか大量にあるんちゃうの」

「それでも、一日中やってるわけちゃうやろ。」

それに、ビデオ屋や言うても、今はもうほとんどDVDやから、あんなん百枚あったって重さはしれてるで」

「そしたらなんで電話掛かってけえへんのよ？」

「警戒してるんちゃうか。」

三十八歳、自営業、に」

「三十八歳、フリーター、よりはマシ違う？」

「ひよつとしたら興信所かなんかに身元調査を頼んだりして」

「なんで、時給八百円で雇う人間にそこまですんのよ」

「そら、そうやわな」

妻の言うことに納得した次の朝、消費者金融からの借り入れ限度額への残高二万円をコンビニのCD機から引き出し、開店早々のパチンコ屋で球を打っていると携帯電話が震えた。

液晶画面に写った番号に見覚えはなかった。

履歴書と職務経歴書を送っている会社は一社もなかったし、第一、その番号は携帯のものだった。

はい

パチンコ屋から掛けていると悟られないよう店から離れて、着信履歴の一番上に並んでいる番号を液晶画面に並べると、すぐに中年の男性の声が返ってきた。

「山田と申しますが今お電話頂きましたでしょうか？」

あつ、山田さん、ご連絡遅くなつて申し訳ないです。

ビデオシヨップ・サライの竹本です

ビデオ屋の社長だった。

急で申し訳ないですけど、今晚ご都合はどうですか？

「あつ、大丈夫ですけど」

じゃあ、七時に履歴書だけ持って店のほうへ来てもらえますか

七時十分前にビデオ屋に着くと、社長はまだ来ていなかった。
「商品でも見といてください」

カウンターのの中の、四十二、三歳位の男性が言った。

自分より年上の人がいるとは思ってもみなかったので、少しほつとした。

カウンターから見て、店内の右半分は雑誌のコーナーで、左半分は、店の表の看板はビデオとうたっていたが、実際はほとんどがDVDだった。

雑誌の表紙の女の子はまだしも、DVDのパッケージの女の子は目のやり場に困るほど露な格好をしていた。

若い子にはかなり刺激的な職場だなと思っていたと「お待たせしました」と言つて竹本社長がやってきた。

「だいぶ、ご苦労されてるみたいですね」

店の上にある喫茶店で俺の履歴書を見ながら竹本社長は言った。

扱っているものがモノだけに、もし、そっちの筋の人ならどうしようかと思つたが、竹本社長は、五十歳半ばの、いかにも人の良さそうなおじさんだった。

「奥さんは、こんなところで働くのに反対はしませんでしたか？」

「いえいえ、そんな贅沢言える立場じゃないんで」

「今は就職活動中ですか？」

「いえ、一緒に会社を辞めた人間と商売しよか言つことで始めたんですけど、なかなか軌道に乗らなくて・・・」

この嘘は昨日から考えていた。

「勤めてはった会社の関係ですか？」

「はい。」

まあ、ブローカーみたいな感じで、最終のユーザーさんと、自分が勤めてたとき担当していた問屋さんの間に入れてもらつてマージンを稼ぐ、まあ、伝票だけの仕事ですので、何か加工したり、在庫持ったりということはしないんですけど、ご存じの通り大阪は今冷えきってますんで、なかなか厳しくて・・・」

「まあ、山田さんらまだ若いから・・・」

（いえいえ、それが若くないんですよ。若かつたらこんなところ来て

ませんから)

「私も今でこそこんな仕事してますけど、バブル時は結構羽振りようさせてもらってたんですよ。それがバブルが弾けた途端、一緒になって弾けてしもて・・・」

竹本社長は笑いながら言った。

「せやけどね、この間、高校の同窓会があつたんですよ。

二十年ぶりやったんかな。

女の子はね、ほとんど来てるんですよ、懐かしいなあって。

ところがね、男は半分も来てない。

日曜日ですよ。

本当に来れない用事があつたのか、それともどうしても来たくない理由があつたのか。

名簿は事前に渡されてたんですよ。

そしたらね、意外な奴が出世してたりね、逆に、頭ええ言うて国立大学行つた奴がね、住所不定とか、聞いたこともないような会社行つてたいした地位にも着いてなかったりするんですよ。

私もね、こんな仕事してるいうて正直にみんなに言うたんですよ。そしたら、おもしろいことやってるなあ、人間なんかどうなるかわからんもんやな、食べていけたらそれでええねん、もう学校出てネクタイ締めてサラリーマンになって定年までおんなじ会社で勤める時代やないもんねえ、ってみんなでワイワイガヤガヤ話しまして。

山田さん、人生下駄履くまでわかりませんで。

まあ、頑張ってください。

仕事はレジ打ち、これはバーコード読んでもらつて、お客さんからお金頂いて、商品を袋に入れるだけです。

あとは、商品の入荷と返品、これもバーコード読んでももらいたいだけです。

お客さんが入ってきたら『いらっしやいませ』、大きすぎず小さすぎず、あんた入ってきたんはわかってますから、そんな程度でいいです。ここの客はどこか恥かしめを感じてますから、商品を買っ

てもらったときも『ありがとうございました』、愛想良過ぎず不愛想でなく、ちょうどお地蔵さんのように、ただそこにいるだけ、つていう感じでお願いします。

まあ、K大学出てはる人には物足りん仕事やと思いますけど、一つよろしくお願いします」

「あつ、こちらこそよろしくお願いします」
採用決定。

「山田さん、明日から来れますか？」

「はい」

「そしたら、夕方六時ですけど、仕事のほうは大丈夫ですか？」

「（なんもせんとぶらぶらしてるだけですから）大丈夫です」

「じゃあ、よろしゅう頼みますわ」

頭を下げ、席を立とうとすると、竹本社長は俺を呼び止めた。

「子供さんは？」

「一人だけですけど」

「お嬢ちゃん？」

「はい」

「いくつですか？」

「小学校の二年生です」

「まだまだ可愛いですよね」

「ええ。」

だいぶ生意気になってきましたけど」

「家族は大事にせなあきませんで。」

私、去年離婚しまして。

この歳になって、自分で洗濯したり、トイレ掃除するなんか夢にも思いませんでしたわ。

まあ、お互い頑張りましょ」

玄関の扉を開けると、居間から娘が駆け出てきた。

「父さん仕事に行くの？」

「うん」

「行ったらあかん」

言つと娘は泣き出してしまった。

「今日は行かへんよ。」

明日から」

「明日もダメ」

娘は俺のジーンズを掴むと更に大きな泣き声を上げた。

「行かへんかったらみんなご飯食べられへんようになんねんで」

娘を引き摺りながら居間に入っていくと、妻が舌を出して笑っていた。

「友達のお母さんが言つてたわ」

ぐずる娘を寝かしつけ、居間に戻ってきた妻が言った。

「ああ見えても子供いうのは、結構、環境の変化に敏感やねんて。」

私も働きに行くようになって、あの子学校から帰ってきててもあんなにかおれへんし、そのあんたが働きに行くって聞いたから自分が一人置いてきぼりにされるって思たんちがう」

「そうなんか・・・。」

あいつにも迷惑かけてんねんなあ」

「どうやったん？」

危ない筋の人やなかったん？」

「人の良さそうなおっちゃんやった。」

色々苦労してはるみたいやわ。

『山田さん、まだまだ若いねんから』って、久しぶりに若いって言われたわ」

テレビのリモコンを押して娘が見ていたバラエティー番組を替えると、代わりに、二日前に、三十八歳で亡くなった、平成の歌姫と言われた女性歌手の追悼番組が流れていた。

バラエティー番組の中でハゲのずらを被って頬を赤く塗っていたお笑い芸人が、黒のネクタイを締め、神妙な顔つきで遺影に手を合

わせている。

“三十八歳という若さでこの世を去った……”

「働こうと思たら歳やって言われるし、死んだらまだまだ若いって言われるし。」

「いったい、三十八歳でなんなんやるな」

六時十五分前に店に入ると、昨日いた四十二、三歳くらいの男性が「どうぞ中に入ってください」とカウンターの中に招いてくれ「内川です、よろしく」と頭を下げた。

「山田と申します。よろしく願います」

「山田さん、そしたら、まず、レジ合わせ、やってもらえますか」
そう言う内川さんはパソコンのキーボードを何回か叩いてレジを開け、カウンターの下から、よくコンビニの店員がレジで小銭を入れて数えている少し傾斜の付いた黒いプラスチックの入れ物を渡してくれた。

「それぞれの溝に小銭を入れていってください。」

一番上の目盛りが枚数になりますから。

私は札数えますので」

レジ金額は一発で合った。

「山田さん、パソコンの方は？」

「ええ、そんな得意なほうじゃないですけど、勤めてたときもやらされてたんで大体はわかります」

「じゃあ、そんな苦労はしないですよ」

言うつと、内川さんはカウンターから出ていき、すぐに商品、裸の女性が露な格好をしてこつちを見つめているDVDのパッケージを持って戻ってきた。

「簡単なんですよ。」

まず、左上の 販売 『F1』のキーを押してください。

そしたら担当者の欄へカーソルが行ったでしょ。

そしたらそこに山田さんのコード‘5’を入れて『Enter』

のキーを押してください」

【担当者】と太い線で囲まれた欄を細い線で二つに区切った片方の欄に、5、そしてそのとなりの欄に“山田”という文字が現れた。

「後は、パッケージの裏に貼ってある細長いほうのバーコードを読んでください」

ピッ、という音がすると、あっという間に、十桁くらいの数字が並んだ商品コードと、とても言葉に出してはいえない商品名、そして、その単価と消費税が画面の桁目を埋めた。

「これ一本だけでしたら、左上の 合計 『F1』のキーを押してください」

画面の真中に、上から【お預かり金額】【商品金額】【おつり】の三段に区切られた桁が現れた。

「【お預かり金額】の欄にカーソルがいつてますので、そこに実際に預かった金額を打ち込んで『Enter』のキーを押してもらうと自動的にお釣りの金額が表示されますんで、最後にお客さんの年齢をだいたいで結構ですから、二十代やったら『F2』のキーを、三十代に見えるんやったら『F3』のキーを、四十代やったら『F4』、それ以上やったら『F5』のキーを押してください。そしてレジが開きますんで。」

後は、お釣りがあれば渡して貰えれば完了です。

あっ、それと、商品を袋に入れてもらう前に、パッケージの裏のもう一つのほうのバーコードあるでしょ。真四角なやつ。それ、防犯タグって言うんですわ。そのまま店から出ようとしたら店の入り口のところでブザーが鳴るようになってるんですわ。結構万引きが多いんですよ。

それを、そのカウンターの下の黒いプレートの上に乗せてほしいんですわ。そしたら解除されて入り口のところでブザー鳴らないんですよ」

「わかりました」

「以上です。」

何回かやってもらったらすぐに覚えれるとおもいますんで。

そしたら、ちょっと商品見に行きましょか」

カウンターを出ると内川さんは、一棚一棚丁寧に説明してくれた。「メーカーって言うか、私らはレベル言うてるんですけど、そのレベルだけでも二十以上あつて、さらにその中で、色んなジャンルに分かれてますから、正直言うて私らも、どこに何があるのかを完全には把握してないんですよ」

「そんなにあるんですか？」

「人それぞれ趣味が違いますから」

言うつと内川さんは、棚から一枚のDVDのパッケージを取り出した。

“五十路白書 感じすぎるお義母様”

「山田さん、こんなん売れると思います？」

パッケージには、しわくちゃの、下手をすれば六十路の女性が、体に何もまとわずこつちを見て微笑んでいた。

「私やったらどう間違つても買いませんね」

「普通はそうでしょ。」

こついつのジャンルで言うたら“熟女”って言うんですよ」

「ええ」

「これがね、結構売れるんですよ。」

それもね、案外若い人が買つていくんですわ」

「ほんまですか？」

「他にも、ロリコンや痴漢もん。それに盗撮もん、いわゆる、覗きつてやつですよ、それと後、じゅうかんって言うのがね・・・」

「そのじゅうかんって何なんですか？」

「じゅうかんのじゅうは、けもの、の、獣。」

じゅうかんのかんは、女三つ書いて、姦。」

要は、動物と人間の女がナニをするやつなんですわ」

「ええっ!？」

店の中を一通り説明してもらって回ったが、内川さんの言う通り種類が多すぎて、ほとんど頭の中に残らなかった。

「まあ、ちよつとずつ覚えていつてください。」

レジが空いたときなんか、ぶらぶらと店内歩きに行ってもらってどんな商品がどこにあるか見て回ってください」

「わかりました」

ドアが開いてお客さんが一人入ってきた。

「いらつしゃいませ」

面接の時に社長に言われた通り、大きすぎず小さすぎない声で言った。

「あのお客さんはＳＭ専門ですわ」

内川さんが言った。

「そうなんですか？」

「ずっとやってるとね、お客さんの好みもわかってくるんですよ」

十分後、内川さんの言う通り、そのお客さんは、縄で縛られた女性赤い蠟燭を垂らされているパッケージを持ってレジにやってきた。

一瞬笑いそうになったが、こらえて、バーコードを読み、料金を告げ、お金を受け取りお釣りを渡し、商品を袋に入れ渡し「ありがとうございます」と愛想良過ぎず悪すぎない声で言った。

ピピピピピピピッ！！

防犯タグを解除するのを忘れた。

「すいません、どうぞ行ってください」

入り口で立ち止まったお客さんに内川さんが謝る。

「すんませんっ」

客が出ていくと、俺は内川さんに謝った。

「いえいえ、そんなん気にせんといってください。」

私もしょつちゅうやりましたし、今でもたまに忘れることがありますから」

その後、たくさんのお客さんが商品を持ってレジにやってきたが、

作業を間違ひなくこなすのに必死で、どんな顔をしたお客さんがどんな商品を買っていったのか全く覚えていなかった。

「あつ、あのおっさん久しぶりやなあ」

五十歳くらいの、頭を角刈りにした作業服姿のお客さんが入ってきたのを見て内川さんが言った。

「あのおっさんはねえ」と内川さんが言いかけたとき、店の電話が鳴った。

「あつ、私出ますわ」

内川さんが受話器を手にした時、その角刈りのおっさんが、突然レジの前にやってきた。

「にいちゃん、羊はあんのか？」

「はあ？」

「羊や羊っ」

「羊つて、あの、今流行りのジーンギスカンつてやつ・・・」

「それは食べる方の羊やないか。」

俺が言うてんのは、犯るほうの、羊や」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0870d/>

羊

2010年10月8日15時43分発行